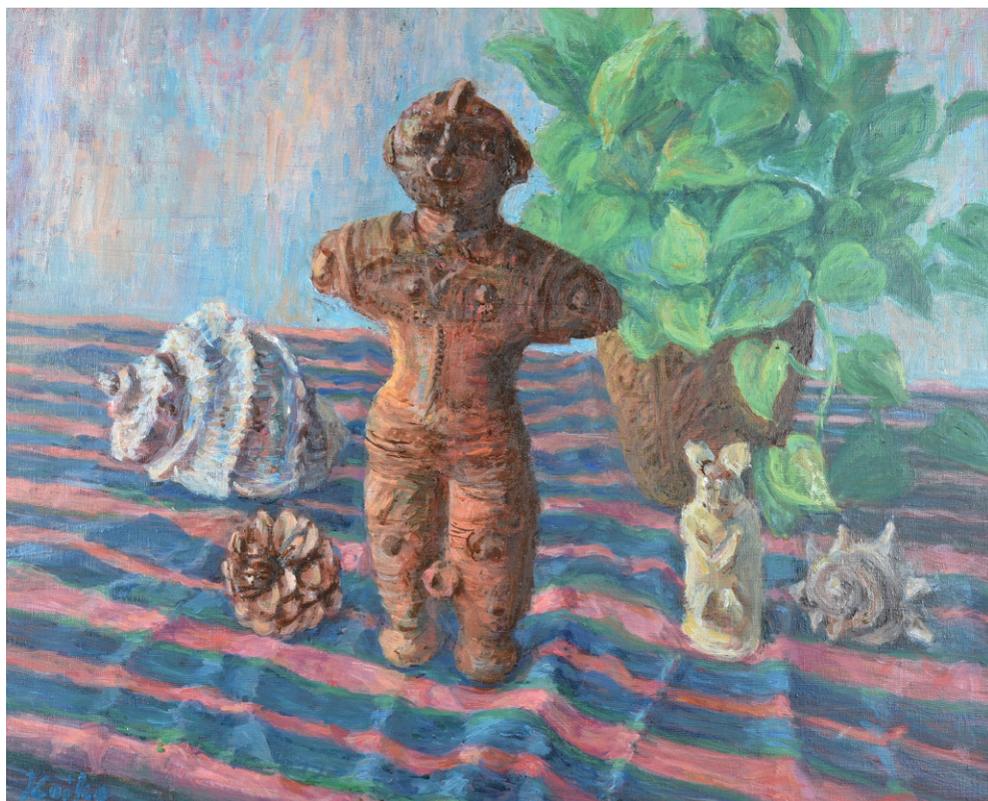


俳句雜誌

令和七年七月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十八卷第七号

水 明

2025 7月号



《今月のかな女》

子を抱く夫見るうれしふうち草

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

昭和二年の作であるが、その年の一月下旬に母を亡くし、しばらくは淋しい生活であった。その後、日を追うごとに家族の心も晴れて、博を連れて動物園や逗子などで遊び、また、夫婦での芝居見物など、結婚して初めてと言ってよい嬉しい思い出を残したようだ。

この句は、そのような穏やかな日常の中で詠まれたものであり、かな女の安堵感に包まれた顔が浮かんでくる。風知草がその時の雰囲気をつたえているようだ。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

余花残花ひとりで帰る丸木橋

永野史代

季音月

巖頭の少女飛び込む夏の川

近藤徹平

季音花

通り過ぎれば溜息聞こゆ賀茂祭

渋谷きいち

水明集

花の中ゆく佐保姫の耳飾り

霜多光代

鼓笛集

形見とて着ざる羅また仕舞ふ

本橋稀香

山紫集

アルバムに躍る心や春帽子

松宮保人

水明

令和 7 年
7 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

月の夏衣(作品)

山本鬼之介

平凡な幸せ(近詠)

小倉倭子

鳥羽谷(近詠)

鳥羽和風

雪嶺 雪欄作家作品鑑賞

染谷風子

ゆずり葉 季音月評

檜鼻ことは

季音「雪」(同人作品)

永野史代 星野和葉
町野広子 ほか

季音「月」(同人作品)

近藤徹平 梅澤佐江
大場順子 ほか

季音「花」(同人作品)

渋谷さいち 保坂翔太
染谷風子 ほか

『水明誌』を繙く

友定洸太

現代俳句鑑賞

網野月を

☆水明賞受賞者ノオト

○自選二十句

菅原 卓郎

更なる飛躍を

染谷 風子

34

32

30

29

24

18

12

10

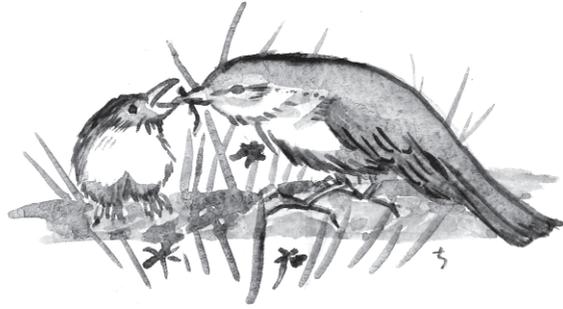
8

7

6

4

1



○自選二十句

カレンダーで鍛えた眼力

新 曆文

日高 道を

俳誌望見

梅澤輝翠

水明集

霜多光代
小林京子

岡田宣子
ほか

作品鑑賞

山本鬼之介

水琴窟 (水明集五月号鑑賞)

池田雅夫

鼓笛集

58

山紫集

60

句集喝采

菅原卓郎

66

水明例会報・各地句会報

67・71

全国大会その他のお知らせ

75

風声・発展基金御礼

81

後記

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

月の夏衣

山本鬼之介

水亭や江差追分切せつと

みどり濃き窓辺にこそこのノクターン

葉桜や花街へ至る
整

風 韻 や 門 跡 寺 の 青 楓
月 涼 し ア イ ヌ 民 族 衣 裳 館
梅 雨 雲 や 頬 杖 様 に な る 窓 辺
籐 椅 子 や 夢 の 旅 路 の 百 万 里
黒 南 風 を 大 漁 節 が 迎 へ 撃 つ

平凡な幸せ

小倉倭子

ギター背負ふ朝のバス停風光る
メモ帳に散らす言の葉クロッカス
化粧はねば殊更清しヒヤシンス
平凡な日日のよろしさ犬ふぐり
夫の留守メダカに餌やる昼下がり
子の説教生真面目に聞く子供の日
紺碧の愛の衣を多佳子の忌

必然的に本来の自分に戻り自然体の視覚、聴覚を十七文字で描く楽しい句作りに戻ってきた様な気がする。喜怒哀楽を探り出した言葉ではなく自らの言の葉で素直に作句を得ている私の人生終盤の時下である。然り気なく心身のリズムに合わせ平凡で且つ、小さな幸せを詠み度く思う、今日この頃の一人居である。

鳥羽谷

鳥羽和風

風 吹 か ば 風 の 色 し て 桜 草
 欽 杖 に 空 の 淋 し さ 鳥 帰 る
 許 さ れ よ 間 引 く 子 猫 の 声 哀 れ
 聖 五 月 亀 の 甲 羅 に 願 ひ 事
 筍 や 昔 土 葬 の 石 擡 ぐ
 植 糸 月 の 水 田 明 り に 浮 く 目 高
 鳥 羽 谷 の 青 田 見 下 す 先 人 碑

水明に入会させて頂いて早、二十年の歳月が過ぎました。城子先生に進められて初めて浦和の全国大会に参加させて頂いた時、若狭は水明の故郷と言われ鄭重なるおもてなしを受けた事、それぞれの句会や若狭衆の隠し芸又、授賞者の歌や舞踊等、最後は参加者全員で大きな輪となり踊った事等思い出いっぱいです。
鳥羽谷の日々を詠みました。先人の碑の清掃や忍ぶ句会は毎年欠かす事無く行っております。今後共宜しくお願い致します。

雪 嶺

季音雪欄作家近詠鑑賞

染 谷 風 子

◇福相寺徜徉（四月号）

境 延昭

◇若狭の風物（四月号）

島津初花

門前に寿陵のすすめ春日影
樹木葬はベンチの高き山笑ふ
まばらなる供花の潤びや寒戻る
住職の愛車レクサス梅日和
春浅し蕎麦屋商ふ焼まんちゆう
建国日印度独立戦士の像
四阿に立てば鯉浮く春の風

零余子かな女夫妻の眠る福相寺及びその近辺の吟行七句。
一句目、まず門前の寿陵の看板を詠む。寿陵とは生前墓だ。
自分の墓は自分で造るのが当世風だ。春の日差しが仏心の如
やさしい。二句目、樹木葬は子や孫に負担を掛けぬ様にとの
親心から造る人が多いと聞く。不信心を正住山という山号
が囁っている。三句目、上五中七で樹木葬の淋しさを写生。
「寒戻る」は作者の心境。四句目、ベンツでもカローラでも
ない所が一興。梅の花を愛でるのに格好な日和の「梅日和」
が動かない。六句目、帰路、蓮光寺でインド独立運動家スバ
ス・チャンドラ・ボースの胸像と出会う。ガンジーは非暴力、
非服従の闘士だったが、ボースは自由インド仮政府を率い、
日本軍と連携し英国軍と戦った。インパール作戦には麾下の
国民軍兵士六千人が参戦した。昭和二十年八月十八日、台湾
で飛行機事故により死亡。遺骨は今も蓮光寺で保管している。

街道の看板メニユーくず湯かな
車座に逝く姉傭ぶくず湯かな
葛の根を豊みかな水に寒晒し
春寒や三十三間山から吹き下ろし
里の田へ白鳥降りて陸まじき
白鳥の一群去りて野は広し
遠山のひかりの中へ去ぬ白鳥

水明の第二の故郷若狭の風物詠七句。添えられたエッセイ
は名文である。熊川葛と白鳥の飛来についての確に綴られて
いる。一句目、日本三大葛の一つとして熊川葛は世に知られ
ている。若狭街道は鯖だけが有名なのではないと作者の意見
二句目、葛湯は滋養もあり体が温まることだから昔から寒い冬
に愛飲されてきた。姉上を傭ぶ作者の優しさから句に滲み出
ている。三句目、若狭は水の国である。春の季語に「若狭のお
水送り」がある。四句目、三十三間山の名称は京都の三十三
間堂の棟木を伐り出したことに由来するそうだ。京の都と若
狭地方の歴史的深さを示す証左だ。五句目、若狭へは三十年
前から白鳥が飛来する。田圃に水を張る農家の努力は大変で
あろう。六句目、作者は春になり白鳥がシベリアに帰った後
の田圃の広さに驚く。それだけ白鳥の存在感が大きかったの
だ。七句目、白鳥を見送る作者の目に残る一抹の淋しさ。

◇春の訣れ（五月号）

山中みどり

料峭や 柩を送る 木遣歌
柩に置く 祭伴 天春の雪
春雷を君の訣れと思ひけり
春雷が伴つてきし 牡丹雪
花冷えや 壺に納まる君を抱く
春愁や 物言ひたげな 遺影の眼
潮止る 大川 漂ふ 百合鷗

御主人を亡くされての追悼句。悲痛な思いが七句に託されている。添えられたエッセイにもそのお心が滲み出ている。一句目、御主人は生粋の江戸っ子である。祭り仲間が揃いの伴天で参列し、鳶頭の木遣歌で柩を送り出す。季語「料峭」は作者の心境である。二句目、柩に置かれた祭伴天に春の雪が舞う。清浄な春の雪は江戸っ子の御主人の心の象徴と思える。四句目、名残り雪の中に春雷が鳴る。「元氣を出せ」と御主人が作者を励ましているかに聞こえる。五句目、夫婦愛の滲む一句である。添えられたエッセイに依れば二十四歳と二十一歳で結婚し今年で六十五年とのこと。その間、様々なことがあったはずである。それが走馬灯の如く作者の脳裏を走る。作者はそれに耐え無言で壺を抱きしめる。「花冷え」との取合せが動かない。七句目、潮が満ち引きしない隅田川の潮止りに百合鷗が漂っている。百合鷗は別名都鳥だ。『伊勢物語』第九段で、業平は角田河のほとりで都鳥を見て、都に残した人を偲び歌に詠んだが、作者は漂う都鳥を見て故人を偲び句を詠んだ。悲しみを美しい詩に昇華した七句である。

◇花の咲く音を（五月号）

網野月を

かな女とは一重樁の白さかな
野梅立つ 俳兄の徳 至高なあり
アーモンド咲けば 澄子の誕生日
桃の花 李白の粋を旨とする
らうばいを好きな人なり 性淡し
花は葉に叱つて 欲しき師を恋す
波音を遠く聞くように 花咲く音

添えられたエッセイを参考に解釈と鑑賞を進めたい。一句目、かな女の全体像を白樺と表現。かな女の作風は「写生を踏まえた自然観照の句は、庶民性をそなえ、柔らかな情感をたたえて愛唱性がある」（小学館刊俳句大事典）と一般に評されている。随筆も一級品である。水明発行所編集の『長谷川かな女全集』の全文を読破することをお勧めする。二句目、作者の俳句の師匠山本紫黄氏を詠む。氏の句集『瓢箪池』を一読した。句材を縦横に断ち切る歯切れの良さは「野梅」とイメージが重なり合う。三句目、面俳句会の俳姉である池田澄子氏を詠む。「アーモンド」ほどの歳時記にも載っていないが広辞苑・日本国語大辞典には「巴旦杏」の別称とある。澄子調の口語文体句と無季句（前へスメ前へススミテ還ラザル）を前提としての季語の選択か。四句目、杜甫は「李白一斗詩百篇」と詠んだ。李白は酒一斗傾けるうちに詩が百篇出来る。作者の詩境は「酒中の仙」だ。五句目、三方五湖一帯は梅の産地だ。若狭俳句会元主宰の島津城子氏か。六句目、師は山本主宰か。月を俳句は解釈が難しいが鑑賞は楽しい。

ゆずり葉

◆季音五月

檜鼻 ことは

身の丈に生きて田楽味噌作る

町野広子

句を読み、中野孝次氏の著書「清貧の思想」を思い出しました。「虚飾を捨て、安らかな心を重んじ、身の丈にあった清楚な生活を旨とする」生き方を、光悦、西行、兼好、良寛らの生き方の中に見出し、物欲にとらわれたバブル期の日本人へ一考を促した書であったように記憶しています。

掲句も同様に、素朴な生活の中にある幸せや、身の程をわきまえた慎ましやかな生活の中にこそある心の豊かさがあることが詠まれているように思います。

田楽味噌という素材で身近な食べ物が、そのような生き方の美しさをさりげなく伝えてくれているようです。

海恋ふる目刺の涙垣間見る

茂木和子

「海恋ふる」、何と美しい措辞でしょう。実際に目刺が涙を流すわけではなく、干された目刺の目の潤みが涙のように見

えたのでしょうか。干された目刺の目に、まるで海を恋しがっているような「涙」を見る、それは作者自身の自然界に生きる生命への共感なのかもしれないし、命の名残を感じた作者の心なのかもしれません。

「垣間見る」というさりげない表現が、作者の思いに共感を誘います。

蒲公英の絮や若狭に古墳群

松宮保人

若狭地方の古墳は水田の中にあるものが多く、作者の住む旧上中町には九基の前方後円墳があり、その内五基が国指定の史跡となっています。古墳の内外の構造はそれぞれに異なっていて、遺存する副葬品等から五世紀に造営されたことが分かっています。旧上中町には「三宅（みやけ）」という地名があり、ヤマト朝廷の直轄地ともいうべき屯倉（みやけ）が若狭地方に設置されていたことが推察されます。若狭地方は、海と山に囲まれた自然豊かな土地であり、水田の中に点

在する古墳群は、数百年・千年以上前の人々の記憶をとどめているかのようです。

句は、儂く軽やかな「蒲公英の絮」の存在感と、「若狭に古墳群」という歴史的厚重感とを対比して、現在と過去をひとつの風景の中に詠んでいます。蒲公英の綿毛が風に乗って古墳群の上を舞っていく映像が浮かんでくるようです。

杭あれば杭に小踊り春の水 大場順子

何かぬくもりのようなものを感じる春の水。冬は曇天の日がほとんどの日本海側に住んでいますと春の訪れは、ことのほか嬉しいものです。

近くを歩くと川や田んぼのそばに打たれた杭があります。それが何のために打たれた杭なのかは定かではなく、風景の一部として辺りの景色と調和しています。「あれば」という言い回しはその情景の描写に余白を与え、絵で見えるようにその景色を楽しむことができます。そして「小躍り」、水が杭に当たり、ぴちゃぴちゃと跳ねたり、さらさらと光を弾いたりする様子が生き生きと伝わってきます。春の喜びを見事に捉えた一句です。

寒月や一人では喧嘩にならぬ 日高道を

冷たく澄んだ冬の夜空に浮かぶ月と、人の心のやるせなさ

が詠まれた一句。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」は漱石の「草枕」の冒頭ですが、「…住みにくさが高じると、安いところへ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟ったとき、詩が生れて、絵ができる」と続きます。

喧嘩は相手がいてこそ起るもので、月が空にあるのに、地上では感情をぶつける相手すらいない、幾つになっても楽しくもあり、難しくもありの人間関係です。ただ、この句はそのような人間関係の悲壮に満ちたものではなくユーモアに包まれていて、「喧嘩にならぬ」という言葉が持つ言葉の軽やかさが、すっと読む者の心に入ってきます。

伸びやかに仮設校舎の卒業歌 石川理恵

句の冒頭に置かれた「伸びやかに」の措辞が非常に印象的です。声の伸びやかさだけでなく、そこに込められた生徒たちの希望、未来への開放感、青春の息吹までを表現しているように感じられます。明るく前向きなトーンが、句全体に光を注いでいます。そしてそれに続く「仮設校舎」は、震災後の状況を想起させ、不遇の中でも、生徒たちが日常を築き、学んでいるという事実を伝えます。仮設校舎で歌われる卒業歌は、力強い感謝と未来への希望の歌であり、そのことを見守る作者の温かいまなざしを感じます。

季
音
雪

丸 木 橋 永 野 史 代

毀れさうな恋の行方よ櫻貝
語呂語呂ゴロゴロ語呂合はせ春雷
筈を煮て外国語に疎くあり
母国語を話せず育ち春愁ひ
余花残花ひとりで帰る丸木橋

あしらひ 星野和葉

店頭にあふるる蔬菜夏きざす
あしらひは生の葉がよし水羊羹
小さき膝きちんと揃へ水羊羹
肩車の祭半纏得意げに
墨書濃き壺万円也祭寄付

残桜の院 町野広子

遙か来て残桜の院なほ深し
残花舞ふ投げ込み寺の静寂かな
想ひ出は瓶に閉ぢ込め桜貝
喃語ムニユムニユ花水木咲きにけり
仮名漢字カタカナ覚えいぬふぐり

若葉風 松井 由紀子

若葉風 森川 義子

夏めくや門前町を日和下駄
ばら賞めて強面に笑みもらひけり
夏蝶の片恋ばかり左右上下
青梅を挽ぐ少年を染むる青
あてどなく歩むも楽し若葉風

霊山の太鼓高鳴り若葉風
鉄線花衿宜の袴の濃むらさき
新緑の磴駆け上る陸上部
一徹の頬をゆるます新茶かな
終の地と決めしこの町柿若葉

空あふぐ 茂木 和子

古茶・新茶 森本 早苗

膳囲む親子四代桐の花
碧空をカンバスにして桐の花
日を仰ぎ空をあふぎて桐の花
山間は香りの坩堝花蜜柑
沖合を豪華船行く花蜜柑

古茶苦し記憶の奥の武勇伝
仏壇に七十五度の宇治新茶
孤高なる俳人ゆら女白牡丹
花潜り花粉まみれの有頂天
母の日やピンクのバットお立ち台

駒形 山中 みどり

春惜しむ 石井喜恵

昼灯す駒形閻魔堂薄暑かな
分骨の青磁の壺や白牡丹
語りかけ遺影頷く夕薄暑
朝掘りの筍ややの如く抱く
紅滲む梅干包む筍の皮

春塵や黄の点滅の交差点
春塵やあと一周の陸上部
花は葉に時の重たき城趾かな
夏木立抜け顕るる朱の社殿
山躑躅ダム放水の滾る音

雨 蛇 網野 月を

葱の花 井上燈女

名校に蝮の名あり初夏も雨
三友花ペンのクロスを垣間見る
濡れそぼつ樹肌の温み春行けり
あぎとふの影は真鯉や若葉騒
椎若葉一樹画角にをさまらず

古農具大切にして葱の花
梅雨晴間女物は低く干す
畦塗て土の香染むる農衣干す
釣人のうしろに初夏の風立ちて
試歩の杖濡らす卯の花腐しかな

かごめかごめ 石山 かつ子

五 月 大村 節代

バイク今獣の熱さ夏野原
風薫る腰に差したる曲尺まがりがね
山女釣足音殺し息殺し
逆縁は人にけもののに麦の波
麦の波かごめかごめの鬼の子に

立ち合ひし無痛分娩聖五月
若冲の鶏羽搏くか五月晴
出奔しさうな回転木馬五月来る
花蜜柑思はず唱歌口づさむ
江ノ電で弁天島へ春の旅

牡 丹 大橋 廸代

梅雨じめり 栢尾 さく子

ときめきの揺れなす風や牡丹百
昁るやうれひ一瞬緋の牡丹
法悦やわれに首ふる牡丹百
獅子岩をよぢる子五人白牡丹
半切とまがふ亀泛き菱の花

さみしさを呼び込んでゐる河鹿笛
捌かるときも目をあげ桜鯛
母の日やすぐ空になる化粧水
ふる里の安房も上総も花曇
戸障子の梅雨じめりして夫の忌くる

山 吹 菊池 ひろこ

仕立屋の 境 延昭

山吹の坂の土色川匂ふ
裏手より訪へば山吹頬撫づる
麗らかやピアノの横の上下窓
春日傘嵜の高さの女学校
八の字に交叉させ漕ぐ鞆二台

降臨の謂れの峰の白つつじ
仕立屋の白の裁ち屑夏めきぬ
二の腕に光る産毛や夏きざす
麦は穂にただ一本の滑走路
メガホンの巨匠の髭にある薄暑

南 無 五明 昇

バルコン 椎野 美代子

雲水の笠の 一列葱の花
武将塚沈め高野の春の闇
春愁の只中にある弥勒仏
南無大師蜂が迎ふる札所寺
残花なほ古城に高き野面積

笑ふかに鳴くかに揚羽訪らひ来
バルコンのラメスカートや綺羅きらら
抱き枕と思ほゆ雲や合歓の花
はつ夏の白粉絹のマテリアル
初夏の大地の息吹瑞みづし

五月の風 島津初花

五月来ぬ 十倉和子

きのふまで校長先生春暮るる
葉桜のここから始まる無人駅
風五月母を留めをく試着室
藤房の揺れて華やぐ水の音
蛇出でて去れよ去れのと捨て言葉

赤子はや拳突き上げ五月来ぬ
海見ゆる高さを城の鯉のぼり
帰途すでに代田となりて水明り
古茶新茶のこして遷化し給へり
新茶汲み父の鉄瓶いとほしむ

夏初め 鈴木康世

記念樹 鳥羽和風

知好楽胸に刻むや夏立つ日
夏めくと富士に雪占現はるる
夏来ると水の奏づる柿田川
夏さぎす無用の用の武者返し
鶏冠の朱重たげに揺れ夏兆す

記念樹に文字の薄らぎ青葉風
おにぎりが涼風連れて来る畑
乳呑み児に涼風貰ふ乳の辺り
壁塗りに土放り上げて南風かな
蛇轆きて助手席の妻手を合はす

季音月

地下鉄

近藤徹平

地下鉄が不意に二階に目借時
花大根旅の一座の宣伝車
屑籠にフォードのおもちやこどもの日
鉢形城へ絶えず寄せ来る麦の波
巖頭の少女飛び込む夏の川

風薫る

梅澤佐江

山吹に篠突く雨の夕闇来
ゴッホの麦の中を歩むや胸疼く
画学生らの絶筆抱く夏木立
恋人も唇冷ゆる山背風
天平尺に遥かな浪漫風薫る

夏兆す

大場順子

桜まじ埴輪の穴を吹き抜けて
仕覆の紐の蝶結びとき春惜しむ
夏兆す暖簾の色を藍に替へ
作務僧きよら回廊きよら夏兆す
薫風や尻尾を天に金の鯨

夏始め

青木鶴城

新茶汲む有田の薄き口造り
濡の曳くきさら薄暑の隅田川
イーゼルの脚の疲れや柿若葉
八寸に威張る竹の子夜懐石
明け易し寝息聞きつつ筆を執る

マドンナは今

日高道を

櫻貝その名に恥ぢぬ櫻色
マドンナの残像乙女椿かな
老いてなほ元マドンナの藍浴衣
夏めくや鏡に違ふ妻のゐて
緑蔭や孫追ふ妻よ転ぶなよ

半夏生

檜鼻 ことは

行く春や明日で仕舞ひと言ふ蕎麦屋
アルゼンチンタンゴの夜明け夏めきぬ
柿若葉清水で洗ふ左の目
万緑や不意にダム湖の赤き橋
語り合ふけふの出来事半夏生

白山吹

丸山 マスミ

神池の主顔して残る鴨
春の鴨置き石と化す沼日和
躑躅山若き庭師のフランス語
たんぽぽの絮を追ふ子ら風に乗る
白山吹一枝を卓に薄茶点つ

厨ごと

池田 雅夫

明易や寝ぐせのままに厨ごと
稀代なる女神降臨梅雨に入る
踏まれたる十葉鼻へ猛反撃
糠雨に息吹き返し瓜の花
穿き古りて忘れられたる靴に黴

夏めく

松宮 保人

菜の花や黄の旗の列黄の帽子
飼猫の催促に来る大朝寝
筍やによきつと越ゆる境界線
夏めくや遊覧船の水脈白し
子燕の飛び立ち間近無人駅

白い鳥居

正木 萬蝶

大皿の普茶あざやかに夏兆す
明易の尺八の音は岳父なり
葉隠れに夏蝶くの一の化身
糸島の鳥居ましろに夏きざす
山吹濃し夫の巾ひ上げの朝

葱坊主

荒井 俱子

ジャンピングキャッチの野手や風光る
一服の妙薬がほし春愁
絶好と言へども二日葱坊主
マネキンの長き手足や夏近し
小面の妖しき笑みや薪能

新茶 大塚茂子

家庭訪問新茶汲む子の素直かな
新茶汲む次第に尾鱈つく話
編集の濃き十年や桐の花
夏めく日子の父となり誇らしき
姉の忌に羅揃ふ妹ふたり

青梅 原田秀子

エメラルド色の青梅慈雨の朝
夜雨静青梅ひとつ落つる音
堂に入る鱈背な半被夏祭
男衆の四肢逞しき荒神興
碧眼も三枚小鉤祭足袋

新緑の息吹 井上玲子

短夜の明けゆく木々の息吹かな
新緑の息吹を胸に樹海ゆく
やませ吹く吹くなくと祈り絵蠟燭
やませ吹く津軽の宿は炬を焚ける
雨そぼつ燃えたつやうな緋のつつじ

草笛 上戸千津子

遠き日や草笛微か星の道
早や五月心ならずも歳重ね
山寺を包む藤の香しつとりと
一桁や「昭和百年」夏兆す
七曜の巡る早さや若葉風

子供の日 内田恵子

ありのままのあなたにハグを子供の日
山躑躅馬ゆつたりと放牧地
ジャスマミンの香りどきどき解けぬ謎
ジャスマミンやスマホのメール消えてゆく
女子会のアフタヌーン・ティー躑躅燃ゆ

夏来る 松本光子

声張りて子供歌舞伎や鉄線花
遠く聞こゆる迷子の猫や濃紫陽花
雄三毛の首輪にひもを梅雨晴間
押入れに猫ゐて蚤ゐてつつがなく
古里の墓道小径夏来る

竹の秋 西浦 千枝子

山並を黄色く染めて竹の秋
カーナビになき古里の道藤の花
初物はまづ仏壇へ豆の飯
地藏寺に幟の多し子供の日
又一人旧友の減り麦の秋

白杖 野口 和子

ソ連邦残る地球儀春埃
白杖の触れてたんぽぽ綿毛飛ぶ
山藤の滝滔々と落つるごと
クレマチス色の溢れし花手水
若葉風新米パパのベビーカー

夏は来ぬ 福田 千春

不足なく暮して八十路濃山吹
面影草「おいで」と揺るる古城跡
夏蝶が父母の墓石の肩にをり
引き売りの豆腐屋若し街薄暑
たかんなをむく十二単をはぐごとく

千本格子 熊倉 千重子

サイクリング万緑の中縫ふやうに
千本格子残る小江戸やさみだるる
旅先の枕馴染めず短き夜
粋な女をなごも混じり「そいや」と揉む神輿
麦の秋越後弁聞く駅に降り

緑蔭 原田 自然

緑蔭や靴脱ぎ捨てて砂場に児
大櫂の緑蔭深き迎賓館
翠陰を求めダム湖の淵に立つ
緑蔭や熊野古道の山幾重
緑蔭や村の鎮守の社堂

夏めく 飛永 鼓

山ひかり田の面ひかりて夏きざす
雑草も陽を貪りて夏きざす
「夏めいて」と書き出す通知クラス会
夏めくや濃淡の山迫り来る
幼子の無垢の笑顔や柿新樹

夏 始む 河野 はるみ

嬰兒の新緑の風腹いつばい
新緑を眼下に侍りロープウエー
江の電の抜くるトンネル夏木立
夏木立主は留守と知らざるや
屑拾ふ文化失すや昭和の日

春日傘 曲淵 徹雄

願ひ聴く地蔵の黙や風車
帰る背に尾をひくチャイム暮遅し
行く春や佐渡に遣れる能舞台
さやうなら背中で回す春日傘
桜まじ今日も休みの理髪店

初夏の旅 松山 清子

初夏の旅果てはコバルトブルーの湖
新緑の五体に染み入る露天風呂
山菜の彩のほどよき夏料理
湯の宿の大正ロマン菖蒲の湯
宿の初夏前山に靄湧き出づる

蝶 一頭 石川 理恵

手水舎の奥へ消えゆく蝶一頭
はつ夏の富士見ゆる窓ゆづりたり
若きらの四肢によきによきと夏めきぬ
姉の手の甲に蟻をり払ひけり
煩はしき人付き合ひや新茶飲む

女釣り師 松島 寛久

典座の鍬に筍匂立つ
風薫る女釣り師は京ナンパー
名も知らぬ灯蛾座敷に居座りて
筍の皮におにぎり山仕事
菜の花や命は一度今さかり

五月雨 瀬戸 雄二郎

傘差すは半数原宿さみだるる
五月雨や次の街灯まで五分
さみだれに障子閉めたる屋形船
門灯は点けつばなしに五月雨
五月雨や大山黒く富士何処

竹の皮 田中章嘉

竹林の中は竹の子天を衝く
竹の皮を脱ぎ出す真昼かさかさと
竹の皮貫ひに来るも老婦人
強風に親を呼ぶ声鴉の子
花桃や実を結び出し雨を受け

☆

☆

特集 俳人それぞれの戦争と平和

巻頭作品10句

山田貴世・森野 稔・加古宗也
松尾隆信・清水 伶・田口紅子
河原地英武・清水和代

俳壇

8月号

7月14日発売
定価1000円(税込)

巻頭エッセイ
中森康之

八木健造 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅳ期」…鈴木しげを・名村早智子

新連載

俳諧文法への招待……………仁平 勝
碧梧桐研究余話……………栗田やすし

連載

季節の移ろい…二十四節気…佐怒賀正美
俳人の住む町…渡辺誠一郎・杉山久子
編集室の風景……………駒草俳句会
知つてるようで知らない俳句用語…井上泰至
今月の句……………ひいらぎ俳句会

俳句と随想12か月

安田のぶ子・矢野景一

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

季音花

葵 祭

渋谷 さいち

銅葺の反り屋根に散る夏落葉
掃き終へて振り向けばまた夏落葉
烏帽子で揺るる葵鬘の稚かな
通り過ぎれば溜息聞こゆ賀茂祭
粹人にせがむ草笛懐古園

播州 弁

保坂 翔太

播州弁で仇を討ちしや大石忌
湯治場の窓へちらつく涅槃雪
坂東太郎魚跳ね光る春の水
春昼や背中で眠る児の重し
犀川のほとりの寺や花あんず

夏 来 る

染谷 風子

夕長し昔庄屋の長屋門
参道の斜光を回す風車
息切らし登る機関車残る雪
花の下我も輪に入り佐渡おけさ
満帆の練習船よ夏来る

ローカル線

横山 君夫

桜まじローカル線の幟立つ
桜まじローカル線は手動ドア
チューリップ砺波平野を際立たす
やはらかに束ねて芹を即出荷
風わたる眼下に富士の新樹海

おでまし

石田 慶子

松の芯君はいつから反抗期
山吹揺れて今日解体の叔母の家
夏蝶のおでましに沸く写生会
合せ鏡は母の鏡台昭和の日
サングラス頭にのせて伊達男

夏つばめ 下川 光子

石橋の残る町並夏つばめ
嬉々として空の自由へ燕の子
次々と躑躅の燃ゆる九十九折
牡丹散る午後の気怠き通り雨
花は葉に想ひは今も遠き日々

草 笛 笹本 啓子

白鷺来水の耀ふ野川べり
暮れ泥み草笛の音哀しかりけり
麦秋や畑中にあるケアハウス
麦の秋どこでも止まる村のバス
夏霞沖のタンカー岩の如

夏 霞 野平 美紗子

久方に訪ふ明日香夏霞
息子住む琵琶湖の湖岸夏霞
草笛聞こゆ小暗き沼の向かうから
得意気に草笛吹きつつ帰宅の子
花の名に諾うべなふ母や薔薇公園

夏の蝶 鈴木 玲子

夜桜に酔語異国語とび交へり
チューリップ黄色き声に囲まれて
董野に問はず語りの影ひとつ
六地藏を行きつ戻りつ夏の蝶
閉ざされし屋敷門へと夏の蝶

万 緑 宮崎 チアキ

白髪のうちねり美し聖五月
がんばりが勝敗分けて五月晴
万緑や巨大病棟そそり立つ
早暁の窓に万緑心肥ゆ
昨日今日晴れて黄金の穂麦かな

源氏香 梅澤 輝翠

窯開き吹墨土草夏の朝
新麦や新ピザ窯に火の入り
その昔ここは町医者薔薇の門
源氏香の余薫さめざる夏の朝
たらひ舟漕ぐ十九の娘夏霞

夏めく

越田栄子

水槽に卵ゆらゆら夏初め
遮光カーテン開けて夏めく陽の光
夏めきてしかと根を張る露地野菜
夏めくや光を放つトンボ玉
筋肉痛二日遅れて夏に入る

牡丹

山戸美子

牡丹崩れ失恋の態蘇る
高速の手洗ひごとに八重牡丹
牡丹崩れ蓄いよいよ一つなり
無人駅牛乳瓶の牡丹かな
意気込みは何処へ飛んだか夏に入る

尻取り

森和子

盛り上がる尻取り散歩麦の秋
リズム良きテニスの音や麦の秋
麦秋や貸農園の弾む声
白鷺の朝日に凜と胸反らす
白鷺に合はすカメラの跪く

鴨の雛

西幅公子

睡蓮の弾く弾くや朝日影
サッカーの如餌を取り合ふ鴨の雛
白壁をなだるる薔薇や活気付く
ドライブインに団地のやうな燕の巢
たんぽぽや踏まるる道に咲きつづく

棟咲く

葛城千世子

風薫る髪をひとつに結び行く
チャイム鳴り化粧中断風薫る
うまく出来るか早口言葉古茶を飲む
棟咲くゆらり鴨達逆走す
川岸に軽鴨親子ゆつたりと

新茶古茶

高橋満耶子

庭手入れ終へて一服新茶古茶
レントゲンに胃の不思議現る薄暑かな
薫風や大屋根リングにぎにぎし
一等は五キロのお米子供の日
根来寺やかつての痕跡青あらし

巨大古墳 野村美子

高層からの巨大古墳や夏めく日
街道を遠く連山麦畑
駅弁や車窓黄金の麦畑
夕焼や白き灯台御前崎
山間の郡上の里の新茶着く

旧友に会ふ 寺内洋子

千の田に千の白雲夏立ちぬ
麦秋や語尾ゆつたりの訛かな
古茶淹れて胸の強張り解かしけり
お持たせの老舗のやうかん古茶やさし
歪みある手作り茶わん古茶を汲む

黄金週間 綿貫ひさの

爺婆の巢鴨銀座や昭和の日
親真似て仔牛草食む五月かな
ポーカーはランプ遊びこどもの日
母の日や供花は「感謝」の赤き色
菊五郎の弁天小僧夏芝居

視点 菅原卓郎

ライ麦や棚にグリムの聖者伝
弥陀仏のほそき巨擘や迎へ梅雨
麦の穂なびく涯に薄暮の古墳群
小満の老妓みつむる共鏡
軍楽隊に弾む沿道チューリップ

朱印帳 新曆文

偕老や躑躅の根津の朱印帳
春塵や芳名帳の墨薄し
幸せは避暑地の宿の心太
佳子様の会釈にこやか夏帽子
露天湯の足裏を刺す夏落ち葉

花 池田珪子

花八分標準木に人の波
花見船橋の謂れを教はりて
奥座敷衣桁に明日の花衣
父のゐて母ゐる今日の花見かな
花めぐり日の傾いて来たりけり

夏の月 清水桂子

道ふさぐ巨木を照らす夏の月
巨漢なる老舗三代目新茶汲む
新築の老人ホーム麦の秋
杜若その紫に八つ橋を
鯨尺ゆかた裁つ母眼裏に

ひまはり 篠崎紀子

ひまはりの迷路に遊ぶ小半日
精一杯生くるひまはり天を衝く
ひまはりや伸びる田畑へ楚々と立つ
ひまはりの真直ぐ陽を見無敵なり
ひまはりの背に陽を受け反抗期

花紀行三かも山 佐々木史女

片栗や花は目線の世界かな
人群れて花かたくりの乱反射
風前の節分草のいのちかな
鹿のゐて囲ひの高し座禅草
座禅草水音遠くひと日暮れ

若葉の候 山岸久美子

幾度の歳月重ね夏木立
朝の陽に応ふ若葉の光かな
マズルカのリズムに揺れる新樹光
弦楽の祈り深まる新樹光
呼びかける生きる喜び若葉風

☆ ☆

『水明誌』を繙く（水明五月号）

友定洸太（「傍点」同人、
「詩友」）

春愁や物言ひたげな遺影の眼 山中みどり

近詠欄掲載作「春の訣れ」は、大切なご家族を亡くされた作者の心のうちが平明な言葉で表現されている連作で、句群から立ち上がってくる淋しさに胸を打たれました。掲句の「遺影」は、お葬式の後でご自宅に飾られているものを想像しました。写真であるのにもかかわらず「物言ひたげ」に思われ、てくるのが季語もあいまって切ない一方、生前のやりとりが蘇ったかのような甘やかな感触もあります。今も作者の心の中には確かに生きているのだと思います。併載のエッセイは、祭り仲間が集まったお葬式の様子やご遺影を選ばれたいささつなどが記されており、幸せな最期であったことが窺われるものでした。その前向きな筆致を思うと、俳句作品が纏っている淋しさがいっそう痛切に迫ってきます。エッセイには書かれることのない、きつと人にも話さないような自分だけの感じ方が俳句に保存されているのです。掲句の一つ前の（花冷えや壺に納まる君を抱く）もそうですし、表題作（春雷を君の訣れと思ひけり）はその極致です。小さなつづやきのようでありながら普遍的な作品です。

送辞読む昂ぶり今も風光る 森本早苗

心地よい春風や日差しを感じながら、学生時代の大切な記憶をしみじみと噛み締めている様子を思いました。当時、在校生代表として卒業生に送別の言葉を贈る大役を務められたのでしょうか。自分の他には誰も言葉を発しない式典特有の静寂な雰囲気を感じます。「昂ぶり今も」という表現からは、蘇ってきた記憶の思いがけない鮮明さに対する驚きと感動が伝わってきます。単なる回想ではなく、再びその高揚感が生じているという、今この身体感覚に焦点を当てているところに惹かれます。この方の脳裏には、卒業していく先輩や送辞の役を持ちかけてきた教師の姿が浮かんでいるかもしれませぬ。自分自身の卒業式ではなく上級生の卒業式が呼び起こされてくるところに人の記憶の不思議さとリアリティを感じます。過去の自分と現在が繋がっていると実感することは、自分が自分であることを肯定することでもあります。さらさらと輝くような春風が学生時代の自分の頑張りを讃えてくれているかのような一句です。

現代俳句鑑賞

網野月を

鳥たちの声ほがらかや木の根開く

柴田多鶴子

〔俳句四季〕5月号・巻頭句より〕

座五の季語「木の根開く」は雪深い地域の季語である。このような季語について地貌季語という言い方もある様である。その地域の特性を表現している季語ということである。この句の地域は、「木の根開く」頃合いと鳥の囀り始めるのが重なっているということなのである。

池の辺に潜望鏡のごと海芋

山本鬼之介

〔俳句四季〕5月号・季語を詠むより〕

海芋は苞が純白で見事な花を咲かす。仏炎苞と言うそうだが、その花を「潜望鏡」と直喩表現している。「池の辺に」何本か屹立していると何ともシニールなイメージである。

そののちの私雨や冬は音

干場達矢

〔俳句四季〕5月号・トイ創刊五周年より〕

言葉の魅力を大いに引き出そうとする句作り挑戦し続けている作家である。読者によって脳裏に浮かぶ景は異なると思うが、言葉の組み合わせから齎される構成物の詩興を感じざるを得ない。この手法は踏み出し過ぎると無意味句になっ

てしまう可能性があり大いに危険なのである。他に「引力はやさし果物籠に桃」がある。

バゲットの似合つ紳士の白きシャツ

桑田真琴

〔俳句四季〕5月号・魚籃坂下より〕

上着を脱いで、「バゲット」を買いに来た「紳士」を想像した。景中の其処だけが明瞭に見えている句なのである。他に「初夏の手招き魚籃坂下まで歩く」がある。

好きなのは他人井油蟬

坪内稔典

〔俳句〕5月号・西郷どんと牛井とより〕

どうして季語「油蟬」なのか、全く分からない。と考えて、他の作家の作品でも同様のことがいえることにはたと気づかされている。どうしてかこの作家の場合は、季語の斡旋や他に取り合わせの「どうしてか」を考えてしまうのである。魅力的な句であるからであろうし、単に言葉遊び以上の何かを受け取れるからであろう。何故か「他人井」が食べたくなってしまうということである。他に「夏めいて西郷どんと牛井と」がある。

仔牛にはりポンを結び雛まつり

太田士男

新任の獣医師の来る樺の花 台帳に牛の鼻紋や牧びらき

〔俳句〕5月号・春紅葉より

元祖牛の句名人の作句である。近頃は牛の作句で高名な方々がおられるが、作者こそが元祖、家元、総本家である。「仔牛」は「子牛」ではない。「樺の花」は年度替わりの季節である。合わせて新任の人事もあるのかも知れない。「鼻紋」は牛にとって指紋・耳型である。元祖ならではの牛に纏わる事々が並んでいる。

種芋の灰きらきらと風に浮き

〔俳句〕5月号・マンタの尾より

種芋は通常、芋を幾つかに切り分けて、切った面に灰を付けて植えつける。その灰が「風に浮」いている。農事の日常の景を詠んで「灰きらきら」の詩景に昇華している。他に「春服やすりと過るマンタの尾」「スリッパの溢れんばかり春障子」がある。

ひこばえをめぐらせうぶごゑのつづき

〔俳句界〕5月号・新作巻頭より

新生を感じる句である。「ひこばえ」「うぶごゑ」は自然界の新生だけでなく、人間社会の様々なアソシエーションにも通じるものがあるように思う。

蝸牛鳴くさういへば鳴きにけり

〔俳句界〕5月号・おらが里の季語より

「蝸牛鳴く」は高地の言い回しのようにある。他に「懸の魚」「蜘蛛合せ」などが併記されている。水明詩友・同人にも故郷を有している方々が多いが、いわゆる地貌季語を掘り

野口る理
亀井雉子男

起こすのも良いものである。

硯海のとうろり春の遊みかな

〔俳壇〕5月号・鍵東より

「硯海のとうろり」という墨の磨り具合を「春の遊み」と言い切れる作者の慧眼と潔さがこの句の胆である。他に「鍵束のその一本の朧かな」がある。

陽炎を抜け出て時差のあるやうな

〔俳壇〕5月号・一幕見より

上五の季語にある「陽炎」の空間を脱して、時間の狭間に身を置いている作者が居る。時空間を行き交っている作者の心象なのか、時空間に対する作者の感覚なのか。連作の一作を鑑賞することの難しさを痛感する一句である。他に「つまらないもの」といはれて桜餅」がある。

Aーの時に嘘つく四月馬鹿

〔俳壇〕5月号・春陰より

A Iは嘘つくことを覚えたようである。人間の悪いところでも何でも吸収して覚えるA Iであるから、至極当たり前のことである。存在しない論文を捏造することなどA Iには朝飯前のことである。座五の季語「四月馬鹿」の斡旋が絶妙である。

不協和音漏る早春の楽器店

〔俳壇〕5月号・不協和音より

楽器を習い始めようとする人々の集まる「早春の楽器店」は賑わっている。「不協和音」は学術的な意味合いだけではなく、来客と店員の駆引きのようにも感じられて、面白い。

戸田正宏

仁平 勝

北村士守

自選二十句

菅原卓郎

沖鳴りの島に孤峰や初弁天
淑氣満つ熾火埋るる囲炉裏かな
春の雪暮夜の列車の軋みかな
自分史の引き摺る昭和春浅し
飴色になりし指貫針供養
爪革をはづす媼の二月かな
貸舟の解かるる舫ひ忘れ雪
汽車喘ぐひと山越えの夏至の夏
常磐木のそよぐ一つ家青田中

老次の黙にてつする夏真昼
秋懐のにぶき楫音川下り
トレモ口を爪弾く流し鳳仙花
宵闇に揺るる比丘尼の手燭かな
凍星や深山精舎の護摩祈祷
浜千鳥ひと夜浮寝の波枕
石庭の砂紋みだれぬ小春かな
立冬の肌まだ青き竹矢来
潮騒にまじる磯笛冬果つる
寛解にそふる一文寒見舞
珈琲のかをる街角冬萌えり

更なる飛躍を

染谷風子

菅原卓郎氏は二〇一九年六月、当時の大宮読売俳句教室（現りんどう俳句会）に入会された句歴六年の新鋭である。私は氏とりんどう俳句会及び熊谷句会で席を同じくしているが氏のここ数年の進歩は目を見張るものがある。今回の新珠賞・水明賞の同時受賞の快挙に対し心より敬意と祝意を表したい。私の記憶にある最初の印象句は左記である。

行く春や畑の隅のわすれもの

水明二〇二一年七月号 山紫集巻頭句で、水明入会三年目の作品である。作者は家庭菜園を趣味としておりその一齣を詠んだ句だ。上五に「行く春や」と大きな形と情を置き、中七下五で具体的に小さな物を描写する作者得意の句法の完成した句である。「行く春」という晩春の麗かさ、「わすれもの」という心の長閑さの響き合った季感溢れる秀逸句だ。

水明賞受賞の対象となった昨年一年間の水明集掲載句の中から氏の句を鑑賞したい。

連弾の駅の洋琴秋惜しむ

可杯で享くる年酒の無礼講

梅東風や明けて半寿の二従姉妹

まず、「言葉の狩人」の氏の三句。一句目、「洋琴」とはピアノのこと。辞書を引かなければ分からない。この漢語を使う事により句が引き締まる。ピロッドに真珠を転がすような透明音に作者は秋の深まりを感じている。二句目、可杯とは底に小さな穴のある杯で指で穴をふさいで酒を受け、飲み切らなければ下に置けない杯と広辞苑にある。中七の「享くる」も心憎い用法だ。これにより年始回りの相手との位置関係と雰囲気が見えてくる。酒豪で鳴らす氏らしい句だ。三句目、半寿は八十一歳、二従姉妹は親同士が従兄弟で六親等、親族の末端だ。長寿を寿ぐ「梅東風」との取り合せにめでたさとユーモアを感じる。

浜千鳥ひと夜浮寝の波枕

一本の長き眉毛や老いの春

トレモ口を爪弾く流し鳳仙花

心情の色濃い作品三句。一句目、浜千鳥は作者の仮の姿か。

中七に作者の嘆きが聞こえる。二句目、作者の自画像。俳句は自嘲とも相性が良い。三句目、昔の三浦洗一の歌に「東京の人」があった。「並木の雨のトレモロを」に始まり私は今でも憶えている。流しは千曲位歌え、弾けるそうだ。この句の流しはギターのとレモロ奏法の名曲「アルハンブラの思い出」が十八番かも知れぬ。下五の「鳳仙花」を考慮すると女性の流しとも解釈できる。繁華街のネオンと脂粉が恋しい。

春の雪暮夜の列車の軋み吸ふ

陽炎のカーブに軋む花電車

春の野に音色添へたる水車かな

詩情の濃い一句一章の句を三句。一句目、夜行列車のレールの軋み音を降り頻る春の雪が吸い込み消してゆくと感じる作者の感性に感服。二句目、陽炎は遠方のもが揺らいで見える現象。花電車は祝賀や記念のために造花などで美しく飾り市中を走るが人は乗せない。どちらも一時的な虚の世界だ。中七の「カーブに軋む」金属音が何処と無く虚しい。三句目、視覚と聴覚の融合した季節感溢れる句。春の忍野八海を思わせる。

節分のかどの豆屋の五合枥

鉄瓶の猛る湯玉や寒の明け

口伝ての開拓悲話や麦の秋

一句目、上五「節分の」の「の」は連体助詞でなく半切れの「の」である。上五の後に弱い切れが入り、中七下五全体に掛かる句形だ。一升枥でも一合枥でもない五合枥が豆屋の微妙な顔付きを読者に想像させる。言葉の選択力が發揮された節分の一齣だ。二句目、「湯玉」とは沸騰時に湧き上がる湯の泡である。寒明けの立春の喜びが作者の心を沸騰させているかの様だ。三句目、氏は福島大学の出身と聞いた事がある。そこから推測すると会津戦争敗北の会津藩の移封先陸奥斗南の悲話か。戊辰戦争で奥羽越列藩同盟の中核となって徹底抗戦し、敗れた会津藩二十三万石は三万石に減封され、斗南に移封になった。会津藩士とその家族は不毛の原野と闘い、飢えと寒さで多くの死者を出した。この恨みを晴らすべく西南戦争の際に警視庁が募集した抜刀隊に多くの旧会津藩士が参集した。「麦の秋」との取合せが限りなく切ない。この句は作者の会津魂への鎮魂歌と思えてならない。

今年の水明集より二句。

披講する声の減り張り菊日和

絵看板替はる名画座冬に入る

身辺材に季語が動かない。氏の新境地だ。

紹介したい句はまだ多数あるが紙幅の都合上割愛したい。

氏の今後益益の飛躍を冀う。

自選二十句

新 曆文

初芝居髪に名残の紙の雪
寒林の踏み入る先の瀬音かな
検温のナースの笑みや春の雪
鈍色の能登を残して鳥帰る
副将の胴衣で負けて卒業す
蒲公英の絮ひと吹きし退職す
揚雲雀悲しき事は全て過去
駄目な子なんて一人も居ない合歡の花
噴水に背を向けて待つ逢瀬かな

箱根号二番ホームの夏帽子
脱サラや炎天の中名刺置く
自販機の真水百円原爆忌
病む夫に新涼と言ふ処方箋
懐石に虫の音ひとつ添ふ離れ
鯛焼や主義も主張も無き平和
秋の夜やジャニーギターの弾き語り
編みかけのセーター解き恋終る
天上に幕末三舟冬の星
サッチモの声の掠れや山眠る
乱れ無き知覧の遺言虎落笛

カレンダーで鍛えた眼力

日高道を

新曆文さんの受賞者ノートを書かせて頂くのは、令和三年の新珠賞受賞者ノート以来四年ぶりである。

その間の曆文さんは、体調面でのご苦労が多かったと思う。私が曆文さんと句会を共にしたのは、平成三十年にりそな俳句会に新しく参加されたときである。

りそな俳句会での曆文さんは、既に「曆文ワールド」と言われる巧みな句づくりで、句友を虜にしていた。

しかし持病の腰痛の悪化に悩まされ、夜間の外出が難しくなり、りそな俳句会を離れられた。

そういう意味では、私は新曆文俳句を、りそな俳句会時代と新珠賞受賞後の二つのフェーズで鑑賞することが出来る。

新曆文俳句は巧みである。ただその底流には氏の気負わないう無心の目で見える身の回りの事象と共に、暖かい心根で感じる肉親の日常や夢が描かれているのが特徴である。

それではまず今月号に掲載された自選二十句を鑑賞する。

初芝居髪に名残の紙の雪

この句は氏が新珠賞を受賞した十五句の最初の句で、「紙の雪」の題にもなっている句である。

作者は主題にそっと隠れて「紙の雪」に焦点を絞った結果、心象あふれる佳句となった。

寒林の踏み入る先の瀬音かな

この句は昨年一年間に同氏が発表した句の中で、私が最も魅かれた一句であり、令和六年水明四月号の水明集で主宰の巻頭を飾った句である。

作者の研ぎ澄まされた感覚が見事に詠まれ、奥行のある佳句となっていて、「紙の雪」からの成長が見て取れる句である。

駄目な子なんて一人も居ない合歡の花

病む夫に新涼と言ふ処方箋

曆文俳句の特徴である肉親への優しい心が表れた佳句です。自選二十句には入っていないが、昨年同氏の発表句に次の句もあります。

子が親に渡すバトンや秋高し

これは、表面的にはある運動会の親子でのバトンパスの微笑ましい風景にとらえるのが普通だと思いますが、同氏が事業家ということを考えると、親子間での事業継承の心配をも想像させる句であると捉えることも出来ます。

秋の夜やジャニーギターの弾き語り サッチモの声の掠れや山眠る

この二つの句にも同氏の成長を感じます。

前句は令和五年発表の句、それに対して後句は昨年水明三月号の山紫集での網野月を副主宰の特選句です。

暦文さんはこの一年でこれまでの「暦文ワールド」と言われた氏の持ち味の軽快で洒脱な俳諧味溢れる句柄をさらに進化させるための努力をされてこられました。掲句はその進化を感じさせます。いわば二次元の世界から三次元の世界への脱皮を感じることが出来ます。

鈍色の能登を残して鳥帰る

自販機の真水百円原爆忌

時事句ともいえるが、それぞれ氏独特の視点と措辞で読者に能登震災や原爆の被災者に寄り添い、その不幸な事実を忘れてはいけないと訴えかけている佳句である。

鯛焼や主義も主張も無き平和

鯛焼を頭から食すか尻尾から食すか、鯛焼の季語により氏独特のユーモアのセンスで俳諧味溢れる句となっている。

新暦文さんの新珠賞受賞時のことばに「夢は近い内に八年生きた証に自分の句集を出したいと思っています。」とありました。

本年三月、氏は見事にその目標を達成されました。

「暦文三百六十五句」のタイトルで、立派な句集を上梓されたのです。

内容は氏が入会后句会で初めて作られた

古稀すぎて無心で見上ぐる春の雲

から始まる三百六十五句が、句友の森下山菜氏の手による味わい深い挿絵とコラボして、暦文ワールドが見事に表現された句集となっています。

カレンダー屋の文夫さんで暦文さん。

カレンダーを作られる過程で鍛えられた眼力は、見事に俳句作りに生かされておられます。

これからも体調とご相談しながら末永くお元気で俳句の世界を漫遊していただきたいと思います。

改めてこの度は水明賞受賞おめでとうございます。

俳誌望見 梅澤輝翠

「野火」 令和七年三月号 通卷九四二号 月刊

主宰 菅野孝夫 発行所 埼玉県春日部市

昭和二十二年六月 篠田悌二郎が創刊。師系篠田悌二郎

「新鮮なことばで二二世紀の抒情を追求する」を理念とする
主宰句 「民生委員やって来る」十六句より

猪垣に囲まれてゐる人の家

近年は山からいるような動物が里に降りて来て田畑を荒らすどころではなく人間と鉢合わせる位近場まで来る。それを防ぐ為に猪垣を設えるのである。囲まれてゐる人の家、日々の生活にはなくてはならない猪垣なのですね。

水に浮く菜屑を冬の日がつつむ

きれいな小川なのでしよう。川上で夕餉の野菜など洗ったのでしようか、冷たい水に取り切れなかつた菜屑を冬の日が優しくつつんでくれている。冬の日がつつむ、その光景を見逃さなかつた作者の優しさが伝わってきます。

冬めくと民生委員がやって来る

なんともユニークな句と受け止めました。地域には必ず居られる民生委員の方、さほどの用が無ければなかなか個別訪問はされない様に思われますが、それが冬らしくなってくるのとやって来るのですね。特別な用があるのでしようか。それとも、とても優しい民生委員さんなのでしようか。

名誉主宰句 「お年玉」 十句から

お年玉 お札の柄も新しく

お年玉を用意しながら20年ぶりの新札をみると、人物の肖像の3Dホログラム、高精細な模様によるすき入れ、この技術は世界初との事なんとびかびかきらきらしている。気分も新たに袋に入れる。お年玉を待っているお子達が居るという事は幸せな事でもあります。

深海集 二八名 各七句より 三名

冬の駅いくつか過ぎて海の駅 梅沢 弘

エブロンを着けてその気に十二月 鶴沢よしえ

本殿を素通りしたる風邪心地 長谷部かず代

蒼茫集 四四名 各八句より 三名

風の音誰も来ぬ戸に注連飾る 真々田 香

路地裏の出窓に猫と福寿草 糸澤由布子

冬うらら川が曲つてゆく光 熊谷幸恵

春蟬集 四九名 各八句より 三名

比叡山日の暮方の京の底冷 西谷富士子

初旅の海のきららやちぎれ雲 岡元美千代

野火集 七一名 各四句より 三名

狐火や熊野古道の無人宿 福嶋千鶴子

古日記昭和時代を処分せり 中川弓子

壇ノ浦令和の冬の波静か 樫崎 泰

酒好きの朝餉に寒の蜷汁 豊田英昭

「吟行の野火」と言われるほど吟行を大切にし月一回は行なっている。又年一回の鍛練会、今年是新潟新発田に五月に新幹線での事、車窓からの新緑、はたまた海の幸を楽しみながらの句会が催されるのでありましようか。楽しみですね。令和七年十一月をもって九五〇号を迎えられるとの事。おめでとうございます。更なる発展飛躍を祈念致します。

山本鬼之介 選

水明集

蟻の道よろけよろけて日永かな
鳩時計三時を告ぐる日永かな
高田城花散り初むる街あかり
花の中ゆく佐保姫の耳飾り
春宵や美酒を酌みつつ耳果報

さいたま 霜多光代

麗かや太鼓橋より鯉の影
弥陀仏に供ふる楽や春の燭
春灯に浮かぶ坪庭京の宿
神苑を統ぶる囀り樹の頂辺
囀を交はす裏手の屋敷林

岡田宣子

春雷の一つ鳴らして遥かなり
行く春や母に青春時代あり
リラ冷えの街はリラ色珈琲香
春駒の赤毛の胴の輝ける
三つ星シェフ監修ランチをみどりの日

さいたま 小林京子

春の夜の宴果てなし同窓会
新婚や若芝映ゆるマイホーム
先生に絡み付く児ら新学期
先づ故郷の山に会ひたし春惜しむ
まだ遠き音のうねりや春の雷

菅原真理

花見小路に提灯ともし大石忌
お座敷に上がる白足袋大石忌
彼岸会の母のぼた餅手にずしり
牧走る春駒風とはしやぎをり
春雷や寝言の犬の耳のむき

寺町知子

上州の笑ふ三山風青し
波跡の砂紋に覗く桜貝
笑ふ山ケープルカーの撥りぬ
句会後の筑波嶺著き遅日かな
微風や回る露店の風車

反町 修

青天に春草匂ふ土手滑り
春草や小屋を抜け出す山羊二頭
春雷や鎮守の杜を揺すりをり
茶碗屋がしんとしゐる春の屋
生氣満つ山やはらかに早筍

越谷 阿部幸代

何やらの鳴き声残し春の闇
妖しさや春の闇濃き泪塚
別れ霜異動の沙汰は立ち消えに
別れ霜やつと慣れたる通学路
夕東風や道行く犬の影長し

利根 倉田星歩

庭草の影揺らめかず蛺蝶
秒針のゆつくり回る日永かな
春陰や階段を踏む膝の声
春陰の歯痛頭蓋を奔りけり
桜鯛やうやく嫁ぐ気になりて

さいたま 皆川更穂

ヒッチハイカー仰ぐ帰雁の棹一つ
鶯の上枝下枝に影移る
留守電に残る肉声花曇
葉桜やつき従ふる幼の歩
晩節のピアノレッスン蝶の昼

さいたま 本橋稀香

ちやぶだいはいつも真ん中桃の花
繁茂して我が春愁の鼻の穴
嫁と乗る後部座席に花の塵
花を出て雲を突き刺すオベリスク
あの世にも記憶の中の花吹雪

森下山菜

荒川線背伸びして待つ春日傘
旗うらら帰郷のシェフのイタリアン
春筍介護度上がる母の剥く
しづしづと分け行く舳先花筏
落花盛ん干物上出来今日はロゼ

田中弘子

ぼつねんと数珠をつまぐり別れ霜
道化師の化粧ゆるりと花曇
春雨や此所はかつての宿場町
心づくしの料理を締むる別れ雪
春うらら日本丸に万国旗

平塚 丸屋詠子

赤べこの頷く頭のどかなり
軽トラの昭和歌謡や畦長閑
屋上の空仰ぎ見る新社員
尼寺の衣擦れの音竹の秋
追憶の開きて閉ちて春日傘

綿引まりこ

葉桜や人出疎らな遊園地
新緑や集団馴染む登校児
家捜しの眼指し一途初燕
緑児の肥立ちの動き若楓
薫風のつぶさに渡る路傍かな

若狭 岡本祥子

強東風や苔むす城の遠き夢
波音や小瓶に眠る桜貝
桜貝少女のネイルあどけなし
泥土の温き光りの彼岸かな
めひかりの揚がる港や桜東風

さいたま 阿部貞代

書き置きはブルーブラック春寒し
烈公の泪か桜一二片
寺町のかそけきながれ春の霜
君とゐるリピングに置くさくら草
花曇肩に凭るる老婦人

さいたま 元田亮一

すみれ咲く小さき庭に色を添へ
大木の白蓮咲けり主はなし
桜散る後悔なしか我が人生
桜咲く富士の山背に笑顔咲く
かるがもの寝床となりぬ花筏

東京 畑宮栄子

花人の思ひおもひの午後となり
日をまとひ風にゆだねる桜かな
早暁の湯気立ち昇る春の駒
記念貨の鈍きひかりや春深し
炭鉞の枕木かくす芝桜

石関六弦

休日の空を真青に囀れり
父さんとだんまり決むる入学子
手拍子のゴスペルはづむ花堤
現し世の脈脈として花筏
病室はみな花の名よ春暮るる

大阪 遠藤人美

滝行者柏手二つ湯殿山
竹寺の般若湯好し春の昼
春昼や能登千里浜の波静か
劇薬のニトロ財布に花見かな
下毛野みかもの山の春の草

飯田忠男

得意気な妻の口笛蝶の昼
山間にバス停ぼつり春の月
子らにかける駐在の声あたたかし
春愁や鏡の我と向かひ合ふ
春愁をぐいと飲み干す大ジヨッキ

さいたま 大熊健司

清貧や焼蛤を一つづつ

行く春や鳴子こけしに薄埃

行く春や又ひとり入る亡き数に

春うららかタログ注文の荷が届く

鳥帰る子供は誰も家継がず

春眠や二度の目覚しまだ遠し

春眠や夫の寝言に返事して

ポニーテール踊るリズムや風光る

風光る花びら追うて黒門へ

犬と駆くる夢よこのまま春眠し

蛤や小さき蟹と生きてをり

紙袋を桜葉降る真ん中に

行けど行けども春の堤の終りなし

花冷やまだ冬の絵を掛けたるまま

一塔の影のやうなり花の雨

双子あて白詰草の髪かざり

我が影に酔うてつまづく春月夜

春月夜お座敷あけの神楽坂

老妻は鼻歌交り目刺焼く

双つ蝶もつれ合ひつつ比丘尼寺

若狭 山崎郁子

御神輿を昇きて気負ひや男振り
佳句一つ詠み込む気迫夏座敷

露の世に端居決め込む八十路かな

饒舌も寡黙も集ひ酌む冷酒

一尺の音を響かせ作り滝

さいたま 緒方みき子

花粉症お冷やをぐいと飲み干しぬ
花粉症祖母のこれから話し合ふ

花粉症クリーニングを待つ昼間

句集読む苦あり楽あり花粉症

屋内のベンチに憩ふ花粉症

横浜 石井妙子

馬の仔や産道を抜けはや立ちぬ
別れ霜駅に流るるちやつきり節

霜の果汽笛のどかに大井川

寿の報持ち寄りぬ春の燭

魚跳ね波紋に揺らぐ春ともし

さいたま 森美枝子

さりげなく差しのべる手やすみれ草
文豪と呼ばれし人よ董草

轟るや砂漠の駱駝まぶた閉づ

耳元にそつと揺らせて三味線草

春の野や遠くに見ゆる武蔵野線

さいたま 香田裕誌

吉川 拓真

吉川 杉浦千祐

さいたま 小野町子

行く春や小川の岸の草構へ

さいたま 秋谷風舎

行く春や山路に残る靴の跡

嘯の乱れて二羽の飛び失せり

老いたるも夢を追ふべし竹の秋

採りたての山独活味噌に和へにけり

花見船溢るるほどの客乗せて

若芝の上に花びら積もりをり

朝寝する人を羨む齡かな

出好きな友と谷根千散歩長閑なり

芝青みボール打つ音響きけり

落つる先迎る間もなき春の虹

迷ひに迷ひメール削除し春の虹

鏡には父の面影春の虹

柔らかき槍のすつくと松の芯

少年兵みな直立し若緑

残雪のスキー楽しみ湯は草津

忙しなく行き交ふ燕世の波乱

残雪にヒールが抜けぬ誤算かな

たんぽぽや香りを放ちアピールを

まぐる像河津桜と張り合ひて

靖国の妻の座永し春の果て
踝をくすぐる草は今萌えし

幼な子の無垢な息満つしやぼん玉

五月田や田毎に月を映しけり

がき大将青大将をぶん回す

野遊びや梵鐘の音を背に受けて

寄せ植ゑの鳥羽の訛や花菫

アンモナイト掘り当てたよと初桜

初蝶や母の古里懐しき

吾の上を旋回嬉嬉と初燕

さ緑をかすめて速し夏燕

故郷はほんによいとこ燕くる

担ひ手のハイテクマシーン麦の秋

大空へ白球を打つ薄暑かな

釣り竿にぐぐつと手ごたへ夏の川

嘯や溪流挟み交はしゆく

嘯や二胡のしらべも翻る

路の臺包みたる苞色淡き

拳巻くふつくら蕨ぼきりと折る

採りたる芹をかき揚げにせむピア開けむ

若狭 松村笑風

西川昭代

森下風湖
(悦子改め)

さいたま 前田夏野

永き日や知恵を絞りに詰めて将棋
誰も来ぬ此処より先の長閑さよ
天気ほめ足組みかへて草の餅
カピバラ似知事の祝辞の長閑さよ
のどかなり何を聞かしても生返事

川口 新井のり子

山駆くる修験道者や雲の峰
母を追ふ子馬の脚の細長く
春駒や少女凜とし矢を番ふ
行く春や稽古仲間の一人減り
行く春や日本の四季の崩れ行く

さいたま 三浦真由美

春陰や崩し字で書く決別状

木村小麦

まなざしの我にやさしき春の馬
春駒や草食む背にそつと触る

石井直子

動き出すからくり時計のどけしや
のどけしや移りし欠伸噛みころす
目玉焼夫に両目をのどけしや

惜春や稜線黒く暮れゆけり
葉桜や転ばぬやうに吉野山
五月雨や若き僧侶の駆け降り来

春の果焼きあご煮出す弱火かな

さいたま 木谷葉子

砂を盛り砂を崩して春日かな

播磨 進

行く春や茶屋を賑はす外国語
放牧のフットワークや春の馬
見返りを求めぬ瞳春の馬
うららかや家族写真の微調整

我ひとり眠れぬ夜の雪柳
数本の穂の芽裏む朝陽かな
卒業す友と重ねし荒稽古
牡丹雪来たか南岸低気圧

囀やここよここよと知らせをり

小駒さち子

彼岸会や交はす時候のご挨拶

平野 楽

囀を空に運んで天つ風
囀の満つる時刻や谷津干潟
野蒜摘み手に残る香と白き球
薇を語る人ありここ手折る

彼岸餅頬張る吾子の吾に覚ゆ
春駒やいつしかならむ黄金馬
帰り道の笛の練習初桜

生きるとは余生にあらず花辛夷
少子化は人の世のこと葱坊主
芋を植う芋のいのちを置くごとく
鶯の鳴いてしづもる和紙の里
ここからは海峡の空鳥帰る

白岡 岡本和男

こでまりや白き小犬も整列し
八十路過ぎかけつこ試す四月かな
枝垂桜川面を覆ひ夢の国
花筏残れる花や後の便
訃報聞き度肝抜かるる春の午後

和歌山 南條さわゑ

泣くやうに焼ゆる夕焼紀ノ川へ

所沢 関根千恵

見晴るかす古刹の菟春の山

さいたま 石黒由美子

味香り色も自慢の新茶汲む

噴水の水面を揺らす金の鳥

睡蓮のターミナル駅薫りたつ

占ひは「好き」から始めマーガレット

山鳩の妻恋ふ声か春の山
カウベルの響く牧場の苜蓿
猫ねまる出窓に覗く春の月

新社員他人より早く恥をかけ

さいたま 川島夕峰

野遊びの果ての充電卒寿かな
新学期ランドセル走るゼブラゾーン

山下ユリ子

右にならへば同顔ずらり入社式

短気は損気笑顔で耐ふる春日傘

浅草や粹な姐さん春日傘

竹の秋真実一路をつらぬきて

ブランド品埃まみれの老の春
遍路笠茶柱にてもてなされ
春はあけぼの無人駅に犬の影

車椅子の膝に輪つかのクローバー

上尾 室井早都子

雨あがり芽吹き音の聞こえけり

三森恵子

目刺食ふ坊主頭の青光り

外国へ赴くあした目刺の香

だし巻を締め家路の春の月

野の末や蝶のいざなふ神隠し

柴犬の春の匂ひをかきゆきて
香炉ゆれ風ひかりゆく浅草寺

川べりの亀ゆつたりと花曇り
東の間の逢瀬にゆるぐ蜃気楼
旅の空彼方此方の花曇り
焼き上がるパンの匂ひや花曇り
花冷や幹彩りて鳥の声

さいたま 鈴木香音子

慰霊碑に学らん一礼風光る
放牧の駒の立て髪風光る
緑道を揃ひの鼻緒風光る
春眠や四次元ポケット使用中
春眠に合はせ鈍行列車揺る

所沢 飯室夏江

公園を独り占めして長閑なり
知床の流水見るも今は独り
公園の見知らぬ遊具子等の笑
草餅と桜餅とでゆづり合ひ
路地裏の知人の庭に雪柳

川口 田村福美

ビル茫洋靈る中の新都心
饒舌の止む時のあり桜餅
二つ目は餡の講釈桜餅
春の雲繩の電車の運転士
肌荒れを気にしだす妻夏近し

さいたま 鈴木藻好

遠足の子つぎつぎ山羊の頭撫つ
鎌倉の露座仏の眼に花ぐもり
桜の芽を束ねて笊に野のひかり
囀のあふれて樟の空深し
山菜やあれこれ揚げて春を食ふ

さいたま 羽島秀子

早蕨や採りて足早妻籠へと
桜の芽や腋芽を摘みてくらしあり
酒菜には根ごと田芹を天婦羅に
野蒜採り子らの飯事遠くなり
囀を見沼田圃の天空へ

糸井しるく

萩焼の窯の火赤赤桜まじ
松陰の教へ遍く桜まじ
進取なる長州ファイブ桜まじ
三陸の鎮魂ラッパ黄水仙
下田港お吉石碑に黄水仙

北山建治郎

覚えなき黄水仙咲く庭の隅
元部下の昇進の報桜まじ
黄水仙今年も咲きて想ふ父
駅舎までひらり花びら桜まじ
黄水仙手折りて卓の一品に

北出久美子

囀や最北端の始発駅

狭庭来てピアノと協せ囀れり

都電の席に桜舞ひ込む雑司が谷

囀やリュック背負ひし夜明け前

外濠のベンチに掛けて花惜しむ

一つ家に独吟の節長閑なり

止めどなく広野に一步入社式

組枝の織りなす崩れ春暖炉

雨あがり雲ことさらに長閑なる

空き瓶に数多の文具昭和の日

泣きやまぬ腕の吾子よりラの夕

太極拳はりセットタイム弥生尽

極楽寺一本もとに八重染井花

姉いもと机並べて春の窓

故里を去る日窓辺の薔薇芽ぐむ

穏やかに知の集ひたる春の昼

長閑さや翁のこころ雲に乗り

母の味たどりたりどいつ草の餅

包み開き賑はひ誘ふ草の餅

春ひと日知恵の輪遊び異国の子

さいたま 稲野幸子

篠原さよ子

宮代 関谷多美子

川口 加藤みち

行く春やわかよたれそつねならむ

「深夜便」行く春乗せてまどろみぬ

いんねんもねたみも無かり春の馬

制服に着られたる子等いまだ春

散る桜掃き清むるを修したり

おしめ換へ育児する夫櫻草

夜櫻や花弁浮きしコップ酒

夜櫻にほろりと酔ひし二十かな

憂ふなり老化はげし櫻の木

忘れな草途絶えし友に文したたむ

生まれ来てわが指にぎる手のぬくし

寄添ひてかたる看護師歩のぬくし

春愁や列車待つ間の木のベンチ

羽衣の天女ゐるかに春の雲

つちふるや指で文字書くボンネット

空うつし動かぬ水面水草生ふ

冷水をぐくりと呻り花疲れ

とことこと小さき歩幅よ春行けり

たんぽぽやギター背負ひし女の子

独り居のつぶやきおかし蜆汁

さいたま 門真宏治

和歌山 嶋田洋子

さいたま 湯浅 和

東京 柳父はる

蓬摘む団子作りは母だのみ
摘草に夢中な母子お茶タイム
大空へ子らがジャンプや春の雲
ペランダの竿にジーンズ春の雲
三世の先祖の墓へ春休み

さいたま 武田重子

濡るともいざいざ行かむ花の雨
吉野山空に溶け込む花霞
花吹雪栄華の舞や石舞台
振り向けば桜蕊降る夢のごと
石塀に木香薔薇のなだれ落つ

さいたま 伊藤美津子

嘴を朝日に染めて囀れり
囀の覚束無くももてる奴
囀や銀のピッコロ吹くやうに
祖母を師に昭和の家族田芹摘み
一反は無限に広し田芹摘む

横山礼子

小さき手バイバイをする花の遠足
花の遠足木漏れ日歩む石畳
白みゆく遠足の朝傘たたみ
花曇頬を撫でゆく雨の息
花曇分けゆく徑に傘ひとつ

草加持永喜夫

ニッポニアニッポン春を舞へ高く
湧く如く駆け登り来る螢鳥賊
散る花の枝を揺するや蝶の舞
天窓や開けて五月の風を呼ぶ
大半を虫に譲つて木芽和へ

駒谷行雄

水ぬるみ七尾の目高浮かびくる
稲荷塚のあの大桜伐られをり
菜種つゆ日課の万歩さあ行くぞ
花吹雪出店の品々おそはれり
軒下の古巢たしかめ初つばめ

鬼石 榊原聰子

赤黄色湖の土手春が来る
花筏千秋楽の跡残し
藤棚をまだかまだかと仰ぎ見る
桜散り今宵は何の花が咲く
石楠花に役者の花をあはせ見る

東京 桐山遊童

両足をしかと大地に蓬摘む
山草の中の王様蓬かな
身をかがめ土手の蓬を摘みにけり
囀りや飛鳥山へとアスカルゴ
囀りを聴きて洗濯日和かな

さいたま 樋口元美

春駒や未だに馴れぬ学生服

さいたま 今西 操

春の馬そばだつ耳に母の呼ぶ

行く春や寿司もて昼の大野原

行く春やフラスカートを新調す

行く春やハンドセラピー修習す

雨上がり一瞬の虹夫と見る

東京 深沢りこ

鳥の声若葉も聴くや日差し浴び

様々な緑工夫し描きたる子

菜の花や植込みはみ出し揺れ咲けり

若葉の中突進すること汽車走る

夜桜を見たくて公園車椅子

藤 沢 小島喜代子

八角蓮色づくつぽみ下を向く

さぎ電話酒のつまみにする夜寒

川風や程良く泳がす鯉職

陽炎や砂漠の鉄路揺らぎをり

空みつめ背のびしてゐるつくしかな

藤 岡 加藤ナヲ子

青空をひとりじめしてすみれかな

裏庭の色はこくなりふぢの花

たんぽぽや空をみつむる日暮どき

足元にはらりと落つるさくらかな

母親を真似てままごと首稽

さいたま 穴戸洋子

目刺焼く一人三尾で恙無し

春月夜我が子抱くかにマンドリン

つきつめて思ふことなき臙月

川岸に光り輝く猫柳

榎本道代

水盤に凜凜しき姿ねこやなぎ

太公望振り向く側に猫柳

優しさの溢るる衣ねこやなぎ

手の強さ桜木のごと春の祖母

東京 中村まどか

花水木光を求め我も我も

お知らせ

「水明集・山紫集」投句の皆様へ六月号の投句は九月・十月の合併号用でした。従って今月号では投句はありません。

先月号の投句用紙用紙に九月・十月号と明記しておりませんでした。おわびし訂正致します。

作品鑑賞

山本鬼之介

花の中ゆく佐保姫の耳飾り 霜多光代

佐保姫は、奈良平城京の東に位置する佐保山の神で、春の野山の造化を司る女神であり、同じく平城京の西にある竜田山を神格化した竜田姫と共にロマンに満ちた季語である。どちらも「山」と思えば発想の展開は限られるだろうが、若々しく活動力旺盛な女性と思えば夢に満ちた俳句が生まれるのではなからうか。

さて、掲句の言葉を追ってゆくと、佐保姫が春の花々で彩られた野道をゆつたりと歩いている姿が浮かんでくる。花の中には、ひらひらと花卉を風に舞わしている桜もあるだろう。俳句は佐保姫の耳飾りに焦点が当てられており、姫の姿を一段と華やかに描いている。

春灯に浮かぶ坪庭京の宿 岡田宣子

京都の東山区にある宿を思う俳句である。かれこれ四十年も前のことになるが、筆者が勤務していた会社の社員旅行で

京都へ行き、八坂神社の近くの料亭で芸妓と舞妓の踊りを観賞したあと、数軒の宿に別れて宿泊した。翌朝の食事が付いた片泊りであったが、京都特有の建物の造りと、瀟洒そのものの宿の雰囲気は圧倒された。

この俳句を読んで、その時のことがありありと再現した。ほんのりと坪庭を照らす春灯には、白椿が似合うのではなからうか。

行く春や母に青春時代あり 小林京子

今春実の母を亡くされた作者であるが、実家での葬儀の際に、親族から母の娘時代のエピソードを聞いたのであろう。今まで知らなかったこともいろいろあり、「えっ、そうだったの。」と、驚くような話もあった。母に対する認識を新たにすると共に、むかし母に苦勞を掛けていた詫びの気持が、少し軽くなったように思えたのではないか。

まだ遠き音のうねりや春の雷 菅原真理

室内で遠雷の音を聞いている。夏の激しい雷鳴には及びもつかぬかわいらしい音であるが、やがて激しくなる予兆のような気配が感じられて無気味である。「音のうねり」という表現が、その時の様子を上手く伝えてるように思える。

気にするほどのこともなく、やがて静かになった。春雷はそのようなものであろう。

春雷や寝言の犬の耳のむき 寺町知子

犬の耳には17本の筋肉があるので、音の発生している方向へ耳を傾けて32方向の音を聞くことが出来るという。そして、音は外耳・中耳・内耳の順に伝わり、1km以上離れた音も聞き取れるというから凄い。さらに驚くのは、音域の範囲即ち可聴領域が六十ヘルツ～五万ヘルツと、人間の倍以上の高い音まで聞き取れるというからこれまた凄いことである。

空の遠くで春の雷が小さく鳴っている。昼寝をしている愛犬が、夢でも見ているのか判らぬ声を発して耳を動かした。犬が聞いたのは遠雷の音か、それとも人には聞き取れぬ音であったのか。

笑ふ山ケーブルカーの擦りぬ 反町 修

紅葉の時季を過ぎて静かに眠っていた山々の木々が芽吹き、春が訪れた。行楽の人数が増え、山にも活気が戻ってきた。軌道に伸びている木の枝や、杖を伸ばした草を擦って登って行くケーブルカーである。「擦りぬ」に、速度の遅い軌道の特徴と人間的な親しみが籠められており、春の山の明るさにぴったりである。

茶碗屋がしいんとしるる春の昼 阿部幸代

一般的な表現では瀬戸物屋のことであるが、「茶碗屋」にはより庶民的な親しみが籠められているように思える。眠気を誘うような春昼に店番の姿が無く、客も居ない。店に入った作者が、その静寂さに違和感を抱いているのであろう。その思いの前提には、瀬戸物が触れ合う「かしゃかしゃ」という音が存在する。

春陰や階段を踏む膝の声 皆川更穂

季語が示すとおり陰鬱で気分乗らない日である。健康管理のために、エスカレーターやエレベーターを使わずに駅の階段を上っていると、少し違和感を感じた。痛いというほどではないが。「無理するなよ」と、膝が呟いているようだ。

ちやぶだいはいつも真ん中桃の花 森下山菜

茶の間の真ん中に丸く大きな卓袱台を据え大家族揃って食事を摂った昭和の昔が懐かしい。現代の椅子の生活ではなく、畳の生活であった。本句の卓袱台も作者の懐旧の産物であろうが、「桃の花」を媒体として無理なく詠んでいる。

春雨や此所はかつての宿場町 丸屋詠子

掲句の宿場町は、歌川広重の版画、東海道五十三次の日本橋から数えて七番目の宿場・平塚宿である。昔の東海道が平塚の中心街を通っており、恒例の「平塚七夕まつり」の時は

大勢の人で賑わう。旧宿場町から大磯方面を望むと、今でも
広重の絵の高麗山こまやまが見える。その昔、平塚宿を通過して大磯
宿まで直行しようとする旅人を客引きの女中がつかまえて、
「これから高麗山を越えるのは難儀ですよ」と言つて自分の
旅籠はたごに引き込んだという。

妖しさや春の闇濃き泪塚 倉田星歩

作者が居住されている茨城県利根町に「泪塚」と呼ばれて
いる場所があり、この俳句と一致する。江戸時代の初期、そ
の地の住人が妻の病気を治すためにご禁制の鶴を捕獲して食
べさせた罪で、幼児や若い娘を含む親族三家の十人が斬首刑
に処せられたという事件の伝承があり、石塔や供養塔などが
遺されている。このような話を知らなくてもただならぬ雰
囲気を感じるだろうが、謂れを聞いて月明りの無い春の夜にこ
の場所を通つたとしたら、数倍の恐怖感を覚えることだろう。

晩節のピアノレットスン蝶の昼 本橋稀香

晩節が作者自身のことだとすれば、「いえいえ未だそんな
お歳じゃないでしょう。」と言いたくなるが、なかなか感心
する姿である。理屈では解つていても、鍵盤を打つ指の動き
と一致しないもどかしさに苛立ちながらも練習を重ねている。
その人の心を静めるように、蝶が庭の花々を巡っている。

しづしづと分け行く舳先花筏 田中弘子

川の本流に乗るのを待っている花筏であるうか。後から後
から桜の花弁が押し寄せて、今にも堰を切るかのような花筏
を掻き分けて猪牙舟がすべつてゆく。江戸時代の大川の景色
が甦つたような粋な俳句である。

軽トラの昭和歌謡や畦長閑 綿引まりこ

田植の時期が近づき、その準備に來ている農家の夫婦であ
ろうか。乗つてきた軽トラを畦道に駐めて作業しているのだ
が、カーラジオからテンポの良い昭和の懐メロ歌謡曲が流れ
てくる。辺りに人家は無く、誰に遠慮することもなくかなり
ボリュームを上げている。きつと呑み仲間とのカラオケでは、
洪い喉を聞かせていることだろう。曲に乗つて仕事が捗つて
ゆく。

緑児の肥立ちの動き若楓 岡本祥子

「産後の肥立ちも良く」の言葉通り、産まれた赤ん坊の成
長はめざましく、日が経つにつれ身体の動きが活発になるが、
その様子を「肥立ちの動き」と表現した。緑児を初夏の陽光
を透した楓の薄緑色の葉に見立てた作者の俳句眼を誉めたい。

花曇肩に凭るる老婦人 元田亮一

桜が咲く頃の曇り日であるから、寒くも暑くもなく、日中ついうとうとしてしまう陽気で、リズムカールに走行する電車の座席では眠気が一層誘発される。或る日作者が電車の座席に座っていたら、臨席の老婦人が軽く凭れてきて、その内傾斜がだんだんと激しくなり、ついに頭が作者の肩に載ってしまった。さてその後の顛末や如何に…。

日をまとひ風にゆだぬる桜かな 石関六弦

開花した桜が二分咲きから五分咲き七分咲きと咲き進み、やがて満開となって花弁を散らしてゆく。最終の姿は花吹雪で、終焉に大舞台で沢山の歌を熱唱した彼の大歌手の姿のように思える。この俳句は「桜の生き様」を表しているのではないか。

春昼や能登千里浜の波静か 飯田忠男

大地震と大水害で甚大な被害が発生し、多くの被災者と死者を出した能登である。幸いなことに、能登の千里浜は地震の被害が無かったようで、石川県羽咋市から宝達志水町にかけて広がる約8kmの砂浜海岸にある「千里浜なぎさドライブウェイ」は盛況のようである。

波音や小瓶に眠る桜貝 阿部貞代

なかなかロマンのある作品である。桜貝には誰もが夢を描くのではなからうか。綺麗な浜辺で拾ってきた桜貝を小瓶に収めて宝物のように文机に置いた。眼を瞑ると、あの浜に寄せていた波の音が聞こえてくる。

大木の白蓮咲けり主はなし 畑宮栄子

大木と言うからには、10¹近くはありそうである。大きな葉を付けた木に、純白の大輪の花が沢山咲いた景色を想像すると、心が幸せ感で充たされるが、その木のある家が空家になっているとすれば、寂しい景色なのかも知れない。

病室はみな花の名よ春暮るる 遠藤人美

入院している知人を見舞に行ったら、病室が全て花の名であったと言う。温泉宿などでこのような例はあるが、病院では珍しいと思う。きっと、入院患者はもちろん、外来の人達も心豊かになり、病院も順調に運営されていることだろう。

子らにかけける駐在の声あたたかし 大熊健司

村落にある駐在所に勤務する中年の巡查を思い描く。登校時と下校時の小学生や中学生に、親しく激励の声掛けをするのであろう。この駐在さんにも同じような子が居るだろう。もしかすると、作者の子供時代の駐在さんがこの句のモデルなのかも知れない。

水琴窟

(水明集五月号鑑賞)

池田雅夫

寒稽古気合かするる変声期

室井早都子

「変声期」、とくに男の子は低い声に変わる。思春期の現象の一つである。武道などでは寒中に集中して稽古を行う。寒さの中、身も気持ちも引き締まるので鍛練には効果的である。声を張り上げ何度も何度も相手に立ち向かってゆく。変声期のために声がかすれてしまいが、その姿がいじらしい。

雪しぐれ相合傘を今すこし

杉浦千祐

霽は雪の一部が解けて雨まじりに降るが、「雪しぐれ」は雨の一部が寒波で雪になって降るのである。言葉のひびきが艶めいて春の近いことを示している。雪しぐれの中を「相合傘」で歩いているのだ。その幸せな時間を「今すこし」長く続くように願っている。二人の情熱で雪が解けるかも…。

登校の列の乱れや薄氷

今西操

一読で場面が浮かんできた。集団で登校する小学生。でこぼこ道の水溜りに張った「薄氷」。それを見てはしゃぐ学童たち。いつもはきちんと一列に並んでゆくものの、今朝は我も我もと薄氷を踏むので「列の乱れ」を生じてしまった。

夜廻の供は昴や柝の音

秋谷風舎

冬の星座でもっとも有名な「オリオン座」。天頂近くには「おうし座」があり、その一角にブレアデス星団がある。いわゆる「昴」である。冬は乾燥し火事がおこりやすい。町内会の当番が「柝」を打ち鳴らし「火の用心」と声をかけながら「夜廻」をしている。昴も一緒に廻ってくれている。

野焼あと近づきたるや豊後富士

畠中風花

「豊後富士」は大分県由布市の「由布岳」のことで、地元では「神います山」と崇められている。早春、野の枯草を焼き、害虫の駆除と灰を肥料とするために行われる。茫茫としていた野が焼かれて豊後富士がくつきりと見える。威風堂々とした山に、あたかも「近づきたる」かに見えたのだ。

胸元のリボン結びや春立てり

小野町子

幼い女の子であろうか。色調の明るい服を着ている。立春を迎え、冬用の服装から春用に変えたのだろう。「胸元」には「リボン結び」の飾りがついている。赤い大きなリボンが目につかぶ。いかにも春らしい、かわいい句である。

麦子ヨコのばふんと割れて春めける

遠藤人美

「ばふんと割れて」の表現に意表を突かれた。板状の「麦子ヨコ」を両手で割つたのだろう。なにげない日常の振舞いの中で季節を感じている。チヨコレートの甘さがそのまま、「春めける」ようにも思われる。その感覚をたたえたい。

老梅の花のしづくや陽の光

田村福美

雨あがりであろうか。満開の「老梅」。その花芯に水滴がついている。朝日が射し込み、キラキラと光る「しづく」。「老梅の花のしづくや」としての切れの効果を活かしている。そして「陽の光」できっちり納めるリズムがいい。

真黒な子猫は碧き目を持ちて

三浦真由美

「子猫」の目という独創的な着眼点に注目する。昼間の猫の眼は瞳孔が閉じ、たての一本線のように見える。その眼球の「碧き目」に興味をもち、しかも「真黒な子猫」のかわいらしさ、純真さを表現しているところに魅力を感じる。

零れてきてはしやく雀ら草青む

北出久美子

「零れる」には、「もれ出る。あふれて流れ出る」。「はみだす」。「散り落ちる」などの意味がある。「草青む」地上に散り落ちるように舞い降りて「はしやく雀ら」なのだ。

薄氷やヒールで突く待ち合せ

稲野幸子

とある公園での「待ち合せ」であろうか。約束の時間にはまだ早い。待っている間の心の動きが「ヒールで突く」に表われていて、その仕草に意地らしさがうかがえる。語順を変えて「待ち合せヒールでつつく薄氷」とし、比べてみよう。

春浅し細き流れの用水路

湯浅 和

「用水路」は見沼代用水のように、かんがいや防火などのために人工的に造られた水路である。早春のころの関東地域は雨が少なく、稲作の作業も始まらず「細き流れの用水路」のままである。「春浅し」の季節を鋭く観察している。

大雪の予報や灯油缶重く

榊原聰子

秩父地方やその近隣の地域では雪が降り積もることも珍しくない。寒波が近づき「大雪の予報」が発せられた。それに備えて「灯油」を買い込んだのだ。一缶では足りぬと数を運んでいる。その苦勞を「灯油缶重く」に込めている。

雛納め母のこよりの細きなる

石井妙子

「こより」は和紙を細いひものように繕ったもの。「雛納め」の雛が動かないように括るのだろう。母が丹精込めて繕ったこより。「細きなる」に母への思いが込められている。

大村節代 選

鼓笛集

病室の母は新緑眩しがる
明易の朝に寝落ちる母と聞く
形見とて着ざる羅また仕舞ふ

本橋稀香

肖るは信濃の空と青き踏む
アイヌの娘レラに真向かひ青き踏む
千年の野仏洗ふ柿若葉

霜多光代

若葉雨水神様にひそひそと
さわさわと故郷の空麦の波
駄菓子屋に並ぶラムネのつつましく

阿部幸代

賀茂祭牛の睫毛に朝の露
門前の蟻踏んでゐる七回忌
風薫る風土記の丘の剣に文字

森下山菜

五月闇ジンをロックでやり過ごす
山法師今朝は布巾を漂白す
路地奥の洗ひ張り屋に蜜柑の花

山中いちい

サッカー児の集合場所に鯉のぼり
待望の内孫祝ふ鯉のぼり
鯉のぼり園児の丈の伸びざかり

榊原聰子

潜り込む登山電車や山若葉
席ゆづる涼しき目元若葉風
俯きし面に闇の薪能

湯浅 和

調停の日これ以上なき暑さかな
母の日を知らぬふりして今年また
木洩れ日や透くる葉のあを夏迎ふ

新井のり子

徒然に來し方思ひ明易し
いつの日のいづくの事ぞ忘草
泰山木ばさり音立て剥れ落つ

小山あつ子

昭和の日母の世代の戦後手記
花菖蒲名人九段第三局
雨近し紅き野茨咲く朝

関谷多美子

憲法記念日こころ穏やかに暮しをり

畑宮栄子

心太すすりむせても微笑みし

優曇華や小さき指ではじきをり

緑蔭に樹の香風の香汝の薫り

横山礼子

沼の精睡蓮四つ浮かべしか

若葉風校外走の子らの声

鼓笛集巻頭（六月号）

私の好きな一句（自句自解）

石関 六弦

からだ中ひろげて飛ぶやてんと虫

天道虫と言えば「翹わつて…」の句が有名だが、それを知る前の俳句を始めた頃の句である。蜻蛉など常に飛んでいる昆虫と違い、天道虫のそれは重たげで着地も必死である。羽、触覚、六本の脚全てひろげて。そんな瞬間を捉えたシンプルなお気に入りの句である。

鼓笛集作品評

大村 節代

形見とて着ざる羅また仕舞ふ

本橋稀香

お母様の句が三句。こんな事もあつたなあと誰もが共感を覚える。

羅とは薄物とも書く。紗や絹の夏用の着物である。近頃は着物を着る人は、特に夏場にはめつたにいない。たまには虫干しや風を通さなくてはと手に取る。もう着ないと分かつていても母上の着物はどうしても処分できない。その様が「また仕舞ふ」に、よく表現されている。

千年の野仏洗ふ柿若葉

霜多光代

平安時代の仏であるうか。その後、数多の戦さ等を怪て流転し今の所に落ち着かれたと思われる。時を怪て、作者はじめ皆様に大事にされ、敬われて、世の安寧を皆様の安寧を祈って静かに世の変遷を見守っておられるのだろうか。

駄菓子屋に並ぶラムネのつましく

阿部幸代

子供達が小銭をにぎりしめて、目を輝かせて集まる。何ともなつかしい景であるが、町で駄菓子屋をとんと見掛け無いが、今でもあるのか、かつて子供だった大人のノスタルジアかとも思うが…。

網野月を選

山紫集

スキップの浮力を醸す春帽子

宮川更穂

万博や色彩り豊かに春帽子

原田自然

到着のホテル目映ゆし春帽子

本橋稀香

真新しい黄色ピカピカ春帽子

樋口元美

——以上特選

三姉妹おそろひ白の春帽子

山岸久美子

江の電や撮り鉄母娘の春帽子

山下ユリ子

手術後を淡く包むや春帽子

山戸美子

風撫でぬ縹子のリボンや春帽子

山中いちい

春帽子新幹線の母子連

湯浅 和

この町の目抜きを歩く春帽子

横山君夫

春帽子風に解くる黄のリボン

横山礼子

アルバムに躍る心や春帽子

松宮保人

春帽子小猫は中で仮眠中

田中章嘉

鎮魂のひたに妃殿下春帽子

霜多光代

スケボーは高く空へと春帽子

青木鶴城

いそいそと正札外す春帽子

元田亮一

幕開きてさりげなく取る春帽子

岡田宣子

| | | | |
|-----------------|-------|-----------------|-------|
| 春帽子どこでもドアを夢見し日 | 吉川拓真 | 春帽子グレーヘアーに似合ふ赤 | 石田慶子 |
| 治療へと挑む覚悟の春帽子 | 綿引まりこ | 春帽子被りて銀座四丁目 | 糸井しるく |
| 稜線をなぞりて歩む春帽子 | 秋谷風舎 | 春帽子安曇野わたる風類に | 井上玲子 |
| 海老蔵に誘はれ急ぐ春帽子 | 新 曆文 | 銅鑼の音や春のお帽子横つちよに | 上戸千津子 |
| トラムから光の中へ春帽子 | 阿部幸代 | 歩行者天国ゆらゆら泳ぐ春帽子 | 内田恵子 |
| マネキンは八頭身や春帽子 | 荒井俱子 | 迎へ無き駅に降り立つ春帽子 | 梅澤輝翠 |
| 検診日かへりのバスの春帽子 | 新井のり子 | 颯爽とガルボを気取り春帽子 | 梅澤佐江 |
| バーグマンに見紛ふ佳人春帽子 | 飯田忠男 | 春帽子手児奈の井戸を通り過ぎ | 大場順子 |
| 春帽子テムズ河行く遊覧船 | 池田珪子 | 日替りで楽しむ愛帽春帽子 | 川島夕峰 |
| 色白の当代小町や春帽子 | 池田雅夫 | つらつらと夫見てしまふ春帽子 | 北山建治郎 |
| 小町通りをゆく春帽子押さへつつ | 石川理恵 | いたづらな風に転がる春帽子 | 熊倉千重子 |
| 溪谷へ舞ふ大好きな春帽子 | 石関六弦 | 春帽子あみだに被りレガッタへ | 倉田星歩 |

| | | | |
|------------------|-------|-----------------|-------|
| 春帽子お気に召すやら気付くやら | 河野はるみ | 春帽子この日のために花飾り | 菅原真理 |
| スキップに合せて揺るる春帽子 | 小駒さち子 | 橋の上風と取り合ふ春帽子 | 杉浦千祐 |
| ティーパーティーの春帽子逆光の君 | 小林京子 | ビル風のもてなし怖し春帽子 | 鈴木藻好 |
| 春帽子進んでくれぬ盃船 | 近藤徹平 | 後ろ前なる大きリボンの春帽子 | 鈴木玲子 |
| 竹の枝軽るさうに夫春帽子 | 榊原聰子 | 姉いもと揃ひのフリル春帽子 | 関谷多美子 |
| 春帽子振りて機上の人となる | 笹本啓子 | フェリスは母の母校よ春帽子 | 瀬戸雄二郎 |
| トラクター操る人や春帽子 | 篠原さよ子 | 春帽子かつては此処をモボとモガ | 染谷風子 |
| 窓際のYチエアの春帽子 | 渋谷きいち | ロンシャンの社交の花や春帽子 | 反町 修 |
| 春帽子腕からませて万博へ | 嶋田洋子 | 春帽子すこし斜めに淑女かな | 高橋満耶子 |
| 春帽子に風の悪戯池の中 | 清水桂子 | 春帽子老若男女皆急がほ | 武田重子 |
| 軽やかに春帽子ゆく街歩き | 下川光子 | 春帽子新調してみむ若返らむ | 寺内洋子 |
| 乳母車おす園長の春帽子 | 菅原卓郎 | 横須賀港に鈍色並び春帽子 | 寺町知子 |

| | | | |
|-------------------|-------|------------------|--------|
| アルバムの中にはるかな春帽子 | 飛永 鼓 | 娘より派手に私の春帽子 | 正木 萬蝶 |
| 年取れどおしやれな女性春帽子 | 南條きわゑ | 顎紐を紅に畑の春帽子 | 松井由紀子 |
| モネ展へ並ぶ並ぶ春帽子 | 西幅 公子 | 新しき一步踏む日や春帽子 | 丸屋 詠子 |
| イケメンのコーヒーソムリエ春帽子 | 野口 和子 | シヨウウインドーは自惚れ鏡春帽子 | 丸山 マスミ |
| 散歩する園児ピンクの春帽子 | 野村 美子 | 顔に淡きパールや春帽子 | 宮崎チアキ |
| 銀髪に色添へやはく春帽子 | 畑宮 栄子 | 声高く羅漢数ふる春帽子 | 森 和子 |
| 春帽子サロン・ド・シャポー花やいで | 原田 秀子 | 遠くへは行かぬ旅なり春帽子 | 森川 義子 |
| 街を行くヘップバーンの春帽子 | 日高 道を | 春帽子二つ並びて露天風呂 | 森下 山菜 |
| ポケットへ洋酒の小瓶春帽子 | 檜鼻ことは | 春帽子で墨田吟行雨上がり | 森下 美智枝 |
| 飛ばされし雉の羽根付く春帽子 | 福田 千春 | 春帽子揺れる顎ひも風遊び | 持永 喜夫 |
| 大人への階段のぼる春帽子 | 保坂 翔太 | ベビーカーにあんよが四つ春帽子 | 森 美枝子 |
| 春帽子姉さん被りにきく野道 | 曲淵 徹雄 | | |

山紫集作品評

網野月を

アルバムに躍る心や春帽子

松宮保人

いま被っている「春帽子」と「アルバム」に写っている「春帽子」は同じものなのであろう。誰かが気付いて「アルバム」を持ち出したのか、単なる偶然なのかは分からない。中七の「躍る心や」と外連味なく言い放ったところが作為を払拭している。

春帽子小猫は中で仮眠中

田中章嘉

何とも可愛らしい句である。この「小猫」は帽子の中にあつて日溜りの眠り猫である。「：中で」はつまり「春帽子」の中でと言うことなのである。選句の後、作者を確認して、驚愕した。男物の「春帽子」の中で、小猫はどのような夢を見るのであろうか。

鎮魂のひたに妃殿下春帽子

霜多光代

「ひたに」は「直に」であらう。妃殿下がひたすら鎮魂の

札をされている様であらうと解した。止事無い方々は、実に帽子の趣味が良い。作者は兼題の「春帽子」の季語から「妃殿下」を連想したのではあるまいか。そんな作句過程を思い浮かべてしまった。

スケボーは高く空へと春帽子

青木鶴城

あの「スケボー」と言うやつは何であらう。二〇二四年以来オリピック競技にも追加種目された、ポピュラーなスポーツである。中七の「高く空へ」はよく分かる表現なのである。座五の季語「春帽子」との関係性を読者はいろいろと想像するだろう。筆者は、「春帽子」の人物が見ていると解したが、中七が「春帽子」に繋がるとすれば、また別の解釈も成立するかもしれない。

いそいそと正札外す春帽子

元田亮一

「正札」が一つ目のポイントであり、「いそいそ」が二つ目のポイントである。「正札」は、まだバーゲンセールになっていない品物の札で、正価で購入したということである。このシーズンの流行りの「春帽子」をいち早く身に着けたいという気持ちをうかがい知ることができる。割引になった衣料を求める時は、正札の上に赤文字の別の値札が貼り付けてあるものだ。

「いそいそ」は「春帽子」が自分の買物であるだけに衝動

買った延長線上にあるのではあるまいか。少々後悔を感じているということではないかと筆者は愚考した。しかしながらそれは下種の勘繰りで、プレセントの為に「いそいそ」と「正札」を外したのかも知れない。

幕開きてさりげなく取る春帽子 岡田宣子

観劇会を想像した。特に観劇でなくとも、幕のある舞台ものならば講演会でも映画館でも良いのであるが、中七の「さりげなく」がどうしても横長の舞台の観劇会、つまり歌舞伎のような特に丸本ものを想像させるのである。幕が開き観客の視線が同じ方を見定まるまでに時がかかるからである。多分、後ろの観客も脱帽してもらって安心したことであろう。

スキップの浮力を醸す春帽子 皆川更穂

中七の「浮力」がこの句の胆である。「スキップ」の何とも軽やかな仕草の中に作者は「浮力」を見出したのである。将に慧眼であろう。加えて座五の季語「春帽子」が主語となつて、述語「醸す」の働きを持たせている。

万博や色彩り豊かに春帽子 原田自然

作者は大阪まで行かれたのであろうか。座五に季語「春帽子」を置いて、余韻を残している。普通は座五の季語の名詞

止で、しっかりと止まっているものだが、中七に「:に」を置いているので、座五の「春帽子」のあとに動詞を補つて解釈することが出来るからである。筆者は、「の人々が集まっている」くらいの意味を付加して解釈してみた。

到着のホテル目映ゆし春帽子 本橋稀香

中七でいったん切れて、座五の季語「春帽子」の象徴する人物を句全体の行為者として位置付けている。つまり「目映ゆい」景を見ているのは「春帽子」を被っている人物と言うことである。身につけるものはその語意を用いて、身につけている人物を表現することができる。日除けの「春帽子」に「目映し」の取合せは、絶妙である。

真新しい黄色ピカピカ春帽子 樋口元美

小学一年生かもしくは幼稚園児であろう。「ピカピカ」のオノマトペは至極当たり前の表現であり、また他の表現の箇所にも重複感があるのだが、「真新しい」「春帽子」と三拍子揃つてあつたらかんとした句に仕上がっている。むしろ作者は「ピカピカ」のオノマトペが常套と言うことも、また表現の重複感についても承知の上のことなのである。作句上の語彙の新天地を開拓するのは正反対に従来の語彙の組み合わせの新味を工夫しているように思われる。

句集喝采

菅原卓郎

◆新谷壯夫「翠嵐」

俳句アトラス

著者略歴 昭和十六年兵庫県生れ。平成十八年俳誌「鴉の子」創刊同人。令和元年第一句集「山懐」上梓。令和六年まで「鴉の子」同人会長を務める。俳人協会会員。大阪俳人クラブ会員。

第一句集上梓後「停滯とその打破に懸命にもがいてきた年月」を経て、奥の細道を訪ねる旅に光明を見出した集大成の句集。「翠嵐」の様な清々しい句を詠んで見きたいとの所存。

懐よりヒ首さきらり夏芝居
柱の傷ひとつふやして子の立夏

源流の一滴春の音落とす
写経いま羯諦に來て窓小春

密会の名残はかなし雪女
第二句、昔は平気で柱に傷をつけて背比べをしていたが、

そのような風習が絶えて久しいのではなからうか。子供は知らぬ間にぐんと背が伸びる。傷を一つ増やすの措辞が巧い。第四句、羯諦羯諦まで来ましたら後数行で終了です。安堵の気持ちで窓を見ると、外は今まさに小春日和で心の平和を取り戻した瞬間を詠み込んだ一句。

海霧走る漁網の句ひたつ湊
門に來て居ずまひ正す遍路かな

勇魚なる佳き名熊野の海に生れ
山寺の階洗ふ臯月雨

第二句、お大師様の前では先ずは居住まいを正す。その後は一連の作業が続く。慣れるまで大変である。お遍路の実感が伝わってくる。第五句、奥の細道の有名な場所である立石寺の長い階段。五月雨が階段と共に心まで清めてくれそうに思える。新緑に五大堂が浮かび上がってくる。

◆堀込 学「かまくらゆり」

霧工房

著者略歴 一九六六年群馬県生れ。俳句同人誌「鬘 TATEGAMI」同人。

句作に当たっては、創刊同人仲間の中島敏之氏の「俳句という詩型の詩を創造する不思議さ」と言う言葉を中心に留めているとの事。東日本大震災以後の渾沌と言う社会情勢に怒りを覚えた心情を詩情として表現できればと述べている。

はしけやしをんなたらしと花大根
繪襖のかたへに群る、とりけもの

耳さとき者より順に風花す
こぼれ梅地下鐵の風ぬるきかな

第四句、耳のいい人はいち早く青空に舞う雪を見ることが出来る。風花を能動的に捉え音まで与えてしまった。ひらひらと言う感じの音だらうか。第五句、マリリン・モンローの有名なシーンを彷彿させる。梅が咲きこぼれる候になり本格的な春も直ぐ近くまで来ている。地下鉄の熱気に待春を感じさせる句に仕上がっている。

蠅螂の反り身そのま、塔となる
老いされぬ少女の中の青蜜柑

一本の木賊の刺さる夕日かな
片しぐれ蝙蝠傘の深ねむり

第一句、カマキリの喧嘩する姿は正に塔である。スカイツリーの螺旋旋じみたイメージの塔のであろうか。第三句、十方がすべて霧に包まれている。市電の運行にも支障をきたしているのだから。霧と市電の取り合わせが面白い。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子 報

仕立屋の白の裁ち屑夏めきぬ
水を張り田毎夏めく越の国
屑拾ふ文化も失し昭和の日
屑籠へナイスシユートや麦嵐
夏兆す暖簾の色を藍に替へ
出窓にかざる硝子の人魚夏兆す

延昭
稀香
はるみ
京子
順子

——以上特選

夏めくや昼に麵類昨日今日
屑籠に米車の玩具子供の日
夏めくや主治医白衣を袖まくり
幼虫のおが屑まみれ兜虫
屑肉で作るコロツケ夏兆す
夏めくや能登にエールを鬼太鼓座
屑なんて一人もいない新樹光
文の末書けず屑かご五月闇

はるみ
徹平
由紀子
稀香
節代
マスマ
順子
千祐

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

磯路ゆく験者に濤声夏めけり
白ワインなみなみ注ぎ夏きざす
夏めくや開け放つ窓鳥の声
貝寄風や藻屑の絡む隠れ岩
二の腕に光る産毛や夏きざす
木木の葉のさらさらと揺る夏めきて
夏めきて水恋ふ子等の声高し

卓郎
京子
チアキ
喜恵
延昭
和葉
和子

青葉閣縁側に塵積もりたり
竹林の自慢話と筍飯
たかななをむく十二単をはぐこくとく
引き売りの若き豆腐屋街薄暑
ひつそりと猫水を飲む薄暑かな
西郷像の目線を辿る薄暑かな
平積みの本に湿りや夕薄暑
行列のコロツケ匂ひ町薄暑

妙子
千春
いちい
慶子
〃

初物の筍は先づ刺身とす
薄暑光裸像の少女安らけし
竹の子や良寛像の目が怖い
鳥の群れ潜り顔出す薄暑かな
昼灯す駒形閣魔堂薄暑かな
濡の引くさらら薄暑の隅田川
かすかなるカレーの匂ひ街薄暑
翁ゆき筍の里露と消え
庭手入れ光まぶしき薄暑かな
薄暑して勧誘員の腕捲り
大川を屋形船ゆく街薄暑
掘り起こし抜けた筍友の笑み
進まない昼のドラマに薄暑かな
外出の着衣悩ます薄暑かな
名人の足はセンサー筍掘る
まつすくな空に薄暑のブルーフィールド
自転車に乗らぬ宣言麦の秋

敏江
峰雄
竺仙
りこ
いちい
峰雄
慶子
妙子
敏江

——以上特選



遠き日や梅干し包む筈の皮
匂となる竹の子地主今は亡く

みどり
鶴城

第三例会 (東京)

五明 昇 報
曲淵 徹 雄

作務僧きよら回廊きよら夏兆す
仕覆の紐蝶結びとき春惜しむ

順子

薫風や尻尾を天に金の鯢

萬蝶

糸島の鳥居ましろに夏きざす
そつば向く裸婦像の髪夏めきぬ
薫風に我が身を透かす天守閣

昇

大皿の普茶あざやかに夏きざす
手水舎の奥へ消えゆく蝶一頭

萬蝶

夏兆すアクセサリーを売る地べた

順子

夏めくや沖の小島に白帆浮く

星歩

路上ライブの歌声空へ夏きざす

千祐

夏めくと富士に雪占現はるる
夏めくや色とりどりに子らの服

雅世

第四例会 (浦和)

石井 喜 恵 報
反町 修

錦絵と見紛ふばかりつつじ垣
次々と躑躅の燃ゆる九十九折

光 子

降臨の謂れの峰の白つつじ
中古デニムに箔付けてゐる春の塵
覇を競ふ如くに躑躅燃え盛る

延昭

借老や躑躅の根津の朱印帳
春塵やあと一周の陸上部

行雄

春塵や芳名帳の墨薄し
擦り抜けて廊下うつすら春の塵

曆文

春塵や五百羅漢の困り顔
春塵やワゴンに漁るぞつき本
回廊に比丘尼の吐息春の塵

翔太

つつじ咲くご近所の道はなやかに
春埃書架に気化せし「ナポレオン」

光子

山の雨春塵洗ふ神楽坂

延昭

戦塵にあらねばやはき春の塵
雨そぼつ燃えたつやうに緋のつつじ

由紀子

山躑躅ダム放水の滾る音

玲子

第五例会 (浦和)

梅澤 佐江 報
河野はるみ

新緑の息吹を胸に樹海ゆく
やませ吹く吹くなど祈り絵蠟燭

玲子

新緑の杜の深さを奥社へと
新緑に隠れて御座す阿弥陀堂
嬰子に新緑の風腹いつぱい

宣子
知子
はるみ

新緑の磴駆け上る陸上部
恋人も唇冷ゆる山背風

義江

新緑や白スニーカーの弾むとき
三陸の鉄道越ゆる青やませ

知子

水位計の水のゆらぎや山背風
やませ吹く津軽の宿は炬を焚ける
緑さす讚美歌洩るる礼拝堂

はるみ

動かぬ電車見知らぬ街の緑かな
八郎潟の村は無口に青やませ

宣子

若松例会 (京橋)

正木 萬蝶 報
石田 慶子

山吹や疎水は音もなく迅く
白山吹一枝を卓に薄茶点つ

稀香

山吹に篠突く雨の夕闇来
山頂へ山吹の道友眠る

マスミ

八寸に威張る竹の子夜懷石
流鏑馬や南無八幡と弓を射る

千祐

山吹濃し夫の巾ひ上げの朝

鶴城

男の子とて八頭身に初節句
面影草ゆかしき人の忌を修す

星歩

神田祭ひよいと顔出す「八五郎」
不足なく暮らして八十路濃山吹
分校残るバス停濃山吹
山吹揺れて今日解体の叔母の家

以上特選
千祐
はるみ
千春
マスミ
慶子

モノクロのかな女の写真かがみ草
 山吹や賽銭入るる音に揺れ
 裏手より訪へば山吹頬撫づる
 捕虫綱八面六臂のガキ大将
 代替りするらし女将濃山吹
 修験者の辿りし山や濃山吹
 明易の尺八の音は岳父なり
 鶴城
 星歩
 ひろこ
 稀香
 京子
 詠子
 萬蝶

関西例会（大阪） 森本早苗報

古茶新茶のこして遷化し給へり
 赤子はや拳突き上く五月来ぬ
 古茶淹れて胸の強張り解かしけり
 お持たせ老舗のやうかん古茶やさし
 少年は青年となり梅は実には
 新しさすだれの香り楽しめり
 古茶苦し記憶の奥の武勇伝
 ハナムグリ花粉まみれの有頂天
 和子
 洋子
 道子
 ノルン
 早苗
 以上特選
 千津子
 洋子
 人美
 ノルン
 和子
 道子
 千枝子
 犬の背の衣消えるや夏兆す
 旧友と語る思ひ出話古茶汲む
 絶え間なく鳥呼ぶ雨後の新樹かな
 夫婦仲さらに深まり古茶淹るる
 海見ゆる高さを城の鯉のぼり
 海見える席に座りて夏料理
 山並を黄色く染めて竹の秋

うまく出来るか早口言葉古茶を飲む
 庭手入れ終へて一服新茶古茶
 鯉職世界の空へ羽ばたけよ
 古茶飲み干す山は大きく肩をはり
 孤高なる俳人ゆら女白牡丹
 千世子
 満耶子
 さわゑ
 洋子
 嶋田子
 早苗

昔話あれこれ48

師輔・元方の民部卿と雛（双六）を打つ

ある時、村上天皇が庚申待ちの宴を催されたことがあった。師輔はじめ多くの人が集まったが、その中に、村上天皇の第一皇子広平親王の祖父元方の民部卿も招かれていた。

*庚申待 庚申の夜、仏家では帝釈天および青面金剛を、神道では猿田彦を祀って、一晩中起きている習俗。その夜寝ると、人身中にある三戸さんしが罪を上帝に告げるとも、命を縮めるとも言う。

広平親王の母は、元方の娘で、更衣の祐姫である。その折、師輔の娘中宮安子も懐妊中であった。

師輔は「さあ、双六をしよう。」と言って「中宮がご懐妊中の御子が男子であるなら、調六じょうろく（さいころの目「六」が二個出ること）よ出る」と言ってさいころを振ったところ、たった一度でその目が出たではないか。

その場に居合わせた人々は誉めそやし、師輔自身も「やったぞ」と得意になつていた。

元方は機嫌を悪くし、顔色も真っ青になつてしまった。

（その後、中宮安子の生んだ憲平親王が冷泉天皇となった。）

その後、元方は亡霊となつて現れ、「あの晩、あれからすぐ師輔の薬人形を作り、その胸に呪いの釘を打つてやった」と言つたと言う。

*元方と祐姫は天曆7・953年に薨じ、死霊となつてその後長く冷泉院とその一統に祟つた。

（つづく）

各地句会



水明鬼石句会 (鬼石)

朝夕の一声かけてオクラの芽
若葉風新米ババのベビーカー
アカシアの花は小さき風にゆれ

聴子
和子
ナオ子

蘭の会 (浦和)

葉を揺らし風が唄ふや夏来る
夏場所や白塗美女を追ふカメラ
満帆の練習船よ夏来る
気まぐれな電波時計や夏来る
たけのことふきの煮物や会津塗
迷ひ込む路地に匂ひや夏来る
土佐沖の勇魚の夢や夏来たる
通せんぼに泣きし日のこと柏餅
返戻のリモージュ焼や柏餅
夏立つやスタンドカレーに新メニュー
柏餅葉表包み裏包み

伸子
小麦子
風子
夕峰
風舎
寿夫
和子
幸子
洋子
月子
京子

若鮎句会 (浦和)

ふらここで飛び出す世界青葉かな
若葉風来るスクランブルのど真ん中
新緑の葉陰さらさら稚魚の影
新緑を走るふたりの車襷
土起こし住処追はれし蚯蚓かな
地下茶房出でて青葉に歩み出す
包まれて新樹の中を歩く夜
目に染むる若葉の匂ひ二十歳かな
母の日を羨む父のゐてをかし

香音子
ひとみ
真菜
山菜
貴子
秀子
芳春
喜夫
稀香

新樹の会 (浦和)

粹筋のをみな三代更衣
更衣髭うつすらと声変り
夏めくや大喚声の国技館
夏場所や呼出しの声大一番
銀ブラや街も木立も更衣
羅の高き声援砂かぶり

風子
徹雄
清吉
道吉
鶴城

めだか句会 (浦和)

天からの途切れぬ祝福聖五月
大曲がり川の向かうに夕焼け空
胸に抱く初子愛しき五月かな
聖五月水辺の音でストレッツチ
釣り糸も流るるままに青嵐

高己
知子
和子
妙子
美津子

手を繋ぎ散歩しやうか聖五月

大の字を風の横切る夏座敷
聖五月レオ十四世誕生す
聖五月止めよ世界の愚の戦
青岬大好きだよと叫んだ日
大安に列なす男女初夏の窓
溜め息もさらつてくれよ青嵐

コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

棟梁の下知は手みぢか風光る
讚美歌に始まる挙式風光る
一服の妙葉が欲し五月病
覚えたての校歌あやふや葱坊主
五月雨やしとどに濡るる能登瓦
畑残し逝きし農婦や葱の花
OKの指の輪高く風光る
夕映えや磯笛長き鮑海女

延昭
洋子
早都子
由美子
健司
美枝子
昇

釜出しのハニーカステラ麦の秋

麦秋や畑中にあるケアハウス
麦の秋焚木の乾く尊徳像
白鷺の飛び去る川面夕日さす
麦秋や鐘厳かにカテドラル
白鷺や海へ傾るる千枚田
白鷺の朝日に凜と胸反らす

啓子
俱子
健司
和子
由美子
和子

楽

青葉の会 (浦和)

久方に訪ふ明日香夏霞
夏椿余生華やく同窓会

朝まだき沖に漁船や夏霞

コンサートの余韻にひたり夏の月

夏霞沖のタンカー岩の如

尾瀬の木道ボツカ消ゆるや夏霞

夏霞人も車も牛歩なり

草笛を聴いて始まる恋心

水明澤つくし句会 (大阪)

天道虫吾の狭庭まで幾千里

待たせても待つのは嫌ひクローバー

葉桜や風吹き抜けて赤子泣く

麦秋や語尾ゆつたりの訛かな

櫻蔭句会 (浦和)

初夏や門前町を日和下駄

乙女の祈り弾む前奏夏に入る

京の宿新茶のふるまひ六腑沁む

新茶汲む尖る娘の丸くなり

ようお越しはな新茶でも淹れまひよか

生くる喜び目の前を飛ばす夏燕

一早く種子島産新茶買ふ

土佐山狭の新茶清らに翠香る

美紗子

真理

美子

美智枝

啓子

啓子

洋子

輝翠

智恵子

人美

ノルン

洋子

由紀子

茂子

久美子

真理

行雄

公子

美智枝

多美子

前かけの母の見送り夏の朝
夕焼や白き灯台御前崎

ひと時をひとり味はふ新茶かな

あゆみの会 (浦和)

小面の妖しき笑みや薪能

情念を揺らして燃ゆる薪能

五人づつ渡る吊り橋谷若葉

八十路の吾未知の世界や薪能

闇に浮く能面迫る薪能

枝折り戸を抜け来る風や若葉の香

野菊の会 (与野)

初夏の白粉絹のマテリアル

碧空のキャンバスに咲く桐の花

宿の初夏前山に靄湧き出づる

平凡な日々のよろしき犬ふぐり

ありのままのあなたにハグを子供の日

牡丹散る午後の気怠き通り雨

鶴川山百合句会 (鶴川)

別れ話語尾くじやぐじやと春行けり

国語とは日本語のこと一年生

母国語を話せず育ち春愁ひ

喃語ムニユムニユ花水咲きにけり

行く春の季語に包まれポストまで

千恵

美子

幸代

俱子

和子

啓子

重子

靖子

藻好

美代子

和子

清子

倭子

恵子

光子

雄二郎

月を

史代

広子

千春

復活祭を語りし俄神父かな
知らぬ子が見せてくれたる蜷野の瓶

新社員の敬語特訓百貨店

春の宵パズル夢中の四字熟語

夜桜に酔語異国語とび交へり

若狭水明会 (若狭)

色白の巫女の緋袴山桜

老いらくの吉野は遠し山桜

かあちゃんのテンション上がるよもぎもち

きのうまで校長先生春は行く

出漁や男見える山ざくら

春塵に喝と見開く仁王の目

ふもとより遠目がよろし山桜

やはらかき訛好きです山桜

行く春や京へ色濃き鯖街道

逝く春や煙で終へる娑婆の旅

行く春や子は颯爽と家を背に

行く春や質屋に坐る招き猫

行く春や水の都の舟下り

吉野路や一目千本山桜

神戸大池句会 (神戸)

街に見ず里には遊ぶ鯉のぼり

フラワー通りも楠公（楠公神社）さんも楠若葉

萬蝶

理恵

美千子

うさぎ

玲子

風花

郁子

友夏

初花

祥子

寛久

鼓

悦子

保人

笑風

昭代

和風

ことは

自然

千津子

早苗

小梅の会 (浦和)

吊り革を持つ落語家の夏羽織
新緑映ゆダム湖にサップの軌跡あり

梅雨に入る千歳着陸五分前

憧憬の大山蓮華前鬼まで

青嵐大仏殿をかけ登る

りそな俳句会 (浦和)

筍や村の古老の腕自慢

夏めくや染付皿の薄造り

皮つきの筍と糠無人店

夏めくや長寿願ふもジョッキ干す

足並をそろへ夏めく街闊歩

山茶花 (浦和)

根分けして次咲く花に思ひ馳せ

薫風に擦られる鬼瓦

円卓の会 (浦和)

新麦のゆるき搗き音水車小屋

冷や酒を幾度も掛ける慰霊の碑

椎若葉見上ぐる先のうすみどり

光とは速さを見せず椎若葉

新麦や郷土自慢のおきりこみ

お化粧はをんなのいのち江戸風鈴

進

惠子

隆文

隆然

道

道

道

建治郎

マスミ

久美子

雅夫

野

美江子

マスミ

卓

亮一

道

拓真

修

太

翔

新麦や新ピザ窯に火の入り
風鈴のりんとう鳴るなり恋文書く

碾臼の嚙みの具合や今年麦

新麦や穀倉地帯の憂ひまた

雛の会 (浦和)

窯開き吹墨土草夏の朝

面打ちの構へきりりと夏木立

地下足袋に踏み応へある筍掘る

江の電の抜くるトンネル夏木立

たかんなの歯触りよろし馳走とす

夏木立抜けて顕る朱の社殿

画学生らの絶筆抱く夏木立

野ばらの会 (浦和)

夜雨静青梅ひとつ落つる音

夏めくや喜怒哀楽を素のままに

夏めきてしかと根を張る露地野菜

実梅挽ぐ昼は大きな握り飯

夏めくやつなぎ姿の兄始動

和歌山水明句会 (和歌山)

新茶汲み父の鉄瓶いとほしむ

青岬ひとりて釣りをする女

初物はまづ仏壇へ豆の飯

風薫る髪をひとつに結び行く

輝翠

京子

月

鶴城

輝翠

公子

燈女

はるみ

チアキ

喜恵

佐江

秀子

夏江

栄子

茂子

みき子

和

道子

千枝子

千世子

一等は五キロのお米子供の日
つつじ咲く口笛吹きつ漕ぐペダル

春惜しみ古里目指すパンダかな

半切とまがふ亀なぎ菱の花

芙蓉句会 (浦和)

扇の風もらひて眠気さそはれし

計のいたる重き牡丹の崩るる日

牡丹崩れ失恋の態蘇る

櫟の会 (浦和)

夏祭いなせ漢のふくらはぎ

原発の止まりしままや麦の秋

荒れるほど神に手向けの祭かな

麦の秋銀輪が行くりズムよく

麦秋や景色を拾ひローカル線

いつになく長老生き生き祭の日

若楠句会 (浦和)

家中の窓開け放つ更衣

久久に尋ぬる庭に柿若葉

母の日や見様見真似のそば饅頭

糴り合ひて頭突き合ふ金魚市

更衣母の家系の猫背かな

有休を子ども五人の更衣

柿若葉大道芸に人の垣

新横綱の鯛の尾頭五月晴

満耶子

きわゑ

洋子

廸代

税子

仁

美子

美子

あつ子

朋子

裕誌

富子

文子

千重子

直子

直子

真由美

風舎

葉子

京子

鶴城

宏治

宏治

宏治

宏治

水明熊谷句会 (熊谷)

約束を果せぬままに花は葉に
チーママの振り鉢巻練る神輿
御旅所のをとこ矜持の担ぎ胼胝

黒堀に祭提燈小夜の風
葉桜や水琴窟の音幽か
心急ぐ祭離子の笛太鼓

葉桜よ後は任せと吉野山
葉桜と石仏背中合せかな
男衆うどん掻つ込み荒神輿

阜月の会 (浦和)

草笛の会話ふたりの車壁
若夏の幸魂さぞす王の墓
鳴らぬとて青筋立てて草の笛

露天湯の足裏を刺す夏落ち葉
旅立ちに幸多かれと夏燕
乗尻の目尻げざやか賀茂祭

芽吹句会 (浦和)

短夜の明けゆく木々の息吹かな
千本格子残る小江戸やさみだるる
姉が継ぐ母の江戸棲五月晴
江ノ電を挟む紫陽花雨に咲く
戸定邸江戸川望む夏座敷

栄子
徹平
卓郎

風子
道子

燈女
茂子

山菜
光代

珪子
曆文
さいち
更穂

玲子
千重子
久美子
弘子

宿の朝外は万緑目に痛し
早暁の窓に万緑心肥ゆ

椅子はこびゆく万緑の大学祭
隣室の衣擦る音や明易し
ミモザの会 (横浜)

夕暮を退廃的に夏の蝶
夏蝶のおでましに沸く写生会
母の日に届きし菓子を古伊万里に

葉隠れに夏蝶くの一の化身
天の果地の果までも夏の蝶
閉ざされし屋敷門へと夏の蝶
コンクラーベ済みし伊太利風かをる

新緑やガラスのテーブルみどりいろ
夏蝶が父母の墓石の肩にをり

若枝句会 (浦和)
枝蛙葉に足掛けて色浴くる
弓道部白足袋袴若葉風
若冲の虎も伸びする初夏の風
校庭に檄と歓声若葉風

更衣母のお下がりが似合ふ歳
寝不足の眼に栄ゆる窓若葉
珊瑚の会 (浦和)
手のひらに息災の色花みかん

富子
チアキ
ひろこ
道を

詠子
慶子
栄子

史代
萬蝶

玲子
美千子
由美子
千春

泰子
貞代
美佐子
敏江

泰生
みどり

蜜柑の花水平線を行く漁船
池塘秘め五月の森はしづまれり

未だ袖を通さぬ着物花みかん
田畑平らに人動き出す早苗月
頬杖の机に香る花蜜柑
笑はせて法話の僧や早苗月

蜜柑の花香りを分かつ風の道
早苗月風に身を置く途中下車
海を向くマドロスの墓花みかん
花蜜柑思はず唱歌口づさむ

俳句の手ほどき (岩槻)
六尺を決めて山笠勇み立つ
天平尺に遙かな浪漫風薫る
瀬戸内の風の明るき花みかん
片蔭や巻尺測る四丁目
農道の深き轍や墜栗花雨

万緑やどつしり座る枯山水
菜園の尺土を愛でし花南瓜
杜若その紫に八つ橋を

翡翠や一瞬の出会い夢の如
此は菜園薔薇咲く庭の老夫入
小満の老妓みつむる共鏡
鴨川や白鷺とある夕涼み
白髪のうねり美し聖五月
バイク今獣の熱さ夏野原

光子

史代
広子
和子
和葉
かつ子
喜恵
マスミ

節代

延昭
佐江
義子
徹平
忠男

翔太
美子
桂子
久美子

幸代
卓郎
知子
チアキ

かつ子

蛸 蛸 の 会 (浦和)

五月晴れ全て命中輪投げかな
集中しつくる席題五月間

緑蔭の送迎バスのアンパンマン
いかづちの真只中のベンチかな

日傘揺る濠の光を高くひ取り
緑蔭や標本木の気高しし

今は昔後姿の日傘びと
夏の嶺アタック隊は雲の中

黒日傘近ごろ多き黒尽くめ
緑蔭の木洩れ日明か塩の道

たかな俳句会(川口)

美術館出でて上野の若葉風
新茶汲むしづく一滴最後まで

足ることを知らざるやうな若葉かな
ひっそりと見目麗しき若葉かな

終の地と決めしこの町柿若葉
告白を呪文のやうに若葉寒

柿 の 木 塾 (浦和)

巫女舞の鈴の音ひびく桐の花
郷関出づる子に花桐の高さかな

若冲の鷄羽搏くか五月晴
尼僧らし経の聞こゆる桐の花

ひさの

幸子

元美

秀子

夏野

風舎

礼子

月を

宣子

小 麦

福 美

のり子

み ち

義 子

鶴 城

かつ子

昇 代

和 葉

桐の花家系図をふと探したし
雨上り薫り灰かに桐の花

杖持ため歩巾はづみし五月晴
りんどう俳句会 (浦和)

チューリップ 砺波平野を際立たす
桜まじ埴輪の穴を吹き抜けて

寄り添はず直立不動チューリップ
桜まじ今日も休みの理髪店

越中は薬の国よ鬱金香
塩梅のまろき即夜の豆ごはん

卓風徹夕翔順君 和章恵
郎子雄峰太子 子嘉子

☆

☆

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。

希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

[指導者] 網野月を [作 品] 5句 [受講料] 1,000円

[方 法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③110円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付

[送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

水明創刊 95 周年記念祝賀会・全国大会のご案内

■水明創刊 95 周年記念全国大会

- 日 時 令和 7 年 9 月 28 日 (日曜日)
受付開始 12 時 30 分 開会 13 時 閉会 16 時 30 分
- 会 場 ロイヤルバインズホテル浦和 4 階「ロイヤルクラウン B」
〒 336-0062 さいたま市浦和区仲町 2-5-1 TEL 048-827-1111
- 行 事 95 周年記念作品 (評論、俳句、エッセイ) 入選作品の発表と授賞、水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の授賞、新誌友紹介の表彰、新季音同人および新同人への委嘱状の授与、兼題入選句の発表と授賞、講評等。

■水明創刊 95 周年記念祝賀会

- 日 時 令和 7 年 9 月 28 日 (日曜日)
受付開始 16 時 30 分 開会 17 時 閉会 19 時
- 会 場 ロイヤルバインズホテル浦和 4 階「ロイヤルクラウン C」
- 行 事 来賓ご挨拶、アトラクションなど

■申込締切

令和 7 年 8 月 31 日

■参加費

| | |
|--------------|------------------|
| 記念全国大会・記念祝賀会 | 25,000円(フルコース宴食) |
| 記念全国大会のみ | 5,000円(コーヒー付) |
| 記念祝賀会のみ | 20,000円(フルコース宴食) |

参加費が高額になりますので、7月号に同封の郵便振替用紙にてお支払ください。

また別途、「申込書」は発行所総務部へご郵送ください。

※なお、発行所へ直接持参される方は、指定「申込書」に参加費を添えて総務部へお申し込み下さい。(発行所ポストへの投函は出来ません)

※申込み後のキャンセルにはキャンセル料が発生することがあります。

※宿泊等については実行委員会へお問い合わせください。

◎皆様お誘い合せの上、多数ご参加ください。

水明創刊 95 周年記念祝賀会・全国大会実行委員会 実行委員長

水明創刊九十五周年記念

兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるってご応募ください。

兼題

「雲の峰」

入道雲、積乱雲、雷雲

「螢」

ほうたる、螢火、
初螢、夕螢、宵螢、
源氏螢、平家螢

「白」

詠込み

※右の傍題以外は不可とします。

句数

通じて二句（一組）

- ・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。
- ・組数は制限しない。

出句料

一組につき千円

締切

七月三十一日（発行所必着）

※投句用紙（水明六月号に同封）を使用のこと。コピーも可。

水明創刊 95 周年記念特別企画

水明創刊 95 周年を記念して、記念特別作品を以下の要領で企画しました。全ての誌友・同人・季音同人の投句をお願いします。9 月・10 月合併号に掲載する予定です。

投句要領 【兼題】 「水」 「明」

※詠み込み・通季（春・夏・秋・冬・新年いずれも可）で一句ずつ

【締切】 7 月 25 日

※投句用紙は 6 月号に添付します。

水明創刊 95 周年記念事業 実行委員会

水明夏行のご案内

下記の日程にて水明恒例の夏行を開催いたします。7 月号に添付予定の「参加申込書」を使用し、参加費を添えて 7 月 22 日必着で発行所総務部までお申し込み下さい。大勢の皆様のご参加をお待ちしております。なお、三日間の参加者には皆勤賞を用意しております。

夏行は俳句の基本の一つである『席題』で詠むことを勉強する場です。各日共に季語による題が一題、詠込みによる題の一題が出題されて、計三句を投句していただきます。

- 【日 時】 第 1 日目 7 月 29 日(火) 13:00～17:00 (受付:12:30)
第 2 日目 7 月 30 日(水) 13:00～17:00 (受付:12:30)
第 3 日目 7 月 31 日(木) 11:30～17:00 (受付:11:00)

- 【場 所】 浦和コミュニティーセンター
(浦和駅東口 「浦和パルコ」10 階)
第 1 日目 : 第 13 会議室
第 2 日目 : 第 15 集会室
第 3 日目 : 第 15 集会室

【参加費】 各日 1,000 円

【申込締切】 7 月 22 日発行所必着

事業部

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2025年 8月号

特集

戦後80年

俳句の力、文章の力

- 戦争俳句句セレクション 名取里美
- 著書語る 上野啓祐 永田浩三
- 近作戦争本の読書感想
- 今泉康弘 篠崎央子
- 私にとつての戦争／戦後世代が考える
- 坂本宮尾 宮崎斗士 柳元佑太

「ダラビ」俳句界NOW すぎき田里

特集 序文／言祝ぎの言葉

- 序文とは何か 筑紫磐井
- 忘れられない「序文」 高野ムツオ
- 松尾隆信 武藤紀子 藤田直子
- 序文に込めた思い
- 本井英 田島和生 柴田多鶴子
- 井上康明 松岡隆子

隔月連載

座談会 若手句集 を読む④

【注目の句集】

橋田憲明 『橋田憲明句集』

連載 宮坂静生 青木亮人 坂口昌弘 八田九郎 ほか

「俳句界」投稿欄

一流選者11名！
充実の投稿欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社 文学の森

お求めは… ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

俳句

8月号 予告

7月25日発売

予価1,300円(本体1,182円)①

巻頭作品50句 — 高野ムツオ
作品21句 — 奥坂まや・中原道夫

昭和100年 戦後80年

昭和のモノを詠んだ句・
体現する句

特別
寄稿

林浩平

歌仙としての「おくのほそ道」
— 安東次男の読みかたを問う

短期集中論考

堀切実

「物仕立てについて」
史的に考える(上)

付録

季寄せを兼ねた 俳句手帖 秋

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団

発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

第62回現代俳句全国大会

投句締切は
7月31日(必着)

WEB投句はこちら



作品募集

現代俳句全国大会は、年に一度、現代俳句協会が主催して行う伝統のある大会です。協会員に限らずどなたでも参加できますから、例年にも増してたくさんのご応募をお待ちしております。

- 応募規定
 - ① 3句一組・2千円 何組でも可。ただし、新作未発表作品に限る。(三組9句同時投句に限り、6千円を5千円にいたします)
 - ② 題詠1句(無料)。昭和百年の今年は、「昭和」をテーマにした俳句を募集(題詠のみの投句は不可)。
 - ③ 前書き不可。所定用紙またはWEBで投句のこと。
- ◎ 投句料は普通為替、定額小為替(無記名)、現金書留(作品同封)、郵便払込(青い払込取扱票使用)のいずれか。
- ※ 郵便払込…加入者名・一般社団法人現代俳句協会 振込口座番号・00160061526003 受領証のコピーを投句用紙に添付。
- 送付先 〒101-0021 東京都千代田区外神田6-1-5-14 借楽ビル外神田7階 一般社団法人 現代俳句協会全国大会係 ☎03-3839-8190
- 締切 7月31日(木 必着)
- 顕彰 協会会員誌「現代俳句」に発表。協会刊行物に採録
- 賞 大会賞、会長賞、後援新聞社賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作。
- 全参加者に入選作品集贈呈
- 全国大会
 - 令和7年11月3日(月・祝)午後1時より
 - 「東天紅」上野店 ☎03-3828-5111
 - 〒110-0008 東京都台東区池之端1-4-33
- 記念講演 昭和百年をテーマにした講演
- 懇親会 午後5時より(会費8千円)
- 本年は別日、別会場にてイベント開催予定 (詳細は後日発表)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|-----|----|----|--------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|--------|---|---|
| 植上 | 植田 | 伊東 | 石川 | 井口 | 五十嵐 | 有村 | 青木 | ■一般選者名 | 和 | 前 | 前 | 館 | 鈴 | 桑 | 池 | 伊 | 安 | 後 | 福 | 星 | 筑 | 永 | 小 | 秋 | 高 | 寺 | 宮 | 宇 | ■特別選者名 | | |
| 田 | 田 | 垣 | 東 | 川 | 口 | 村 | 野 | 鶴 | 浩 | 弘 | 川 | 正 | 三 | 政 | 澄 | 藤 | 西 | 藤 | 佐 | 野 | 紫 | 井 | 林 | 尾 | 野 | 中 | 大 | 大 | 江 | | |
| 密 | 規 | 論 | 青 | 寒 | 秀 | 王 | 月 | 志 | 一 | 弘 | 明 | 二 | 正 | 美 | 美 | 章 | 篤 | 弘 | 正 | 高 | 士 | 純 | 美 | 子 | 敏 | 和 | 谷 | 静 | 上 | | |
| 杉 | 清 | 清 | 塩 | 佐 | 佐 | 酒 | 衣 | 小 | 桑 | 桑 | 黒 | 倉 | 木 | 神 | 河 | 川 | 川 | 川 | 上 | 鹿 | 春 | 恩 | 隴 | 岡 | 岡 | 大 | 大 | 江 | | | |
| 浦 | 水 | 水 | 見 | 藤 | 藤 | 坂 | 井 | 山 | 野 | 野 | 岩 | 村 | 村 | 村 | 村 | 村 | 村 | 崎 | 益 | 又 | 藤 | 知 | 石 | 榮 | 由 | 耕 | 大 | 大 | 中 | | |
| 圭 | 造 | 恵 | 文 | 直 | 弘 | 次 | 貴 | 昌 | 句 | 紗 | 和 | 徳 | 明 | き | こ | 津 | 佃 | 月 | 千 | 谷 | 谷 | 田 | 武 | 高 | 高 | 高 | 高 | 潮 | 関 | 上 | |
| 芳 | 野 | 西 | 成 | 波 | 並 | 名 | 中 | 永 | 中 | 長 | 仲 | 董 | 津 | は | 悦 | 月 | 千 | 谷 | 谷 | 田 | 武 | 高 | 高 | 高 | 高 | 潮 | 関 | 上 | 上 | | |
| 賀 | 木 | 谷 | 池 | 切 | 木 | 久 | 村 | 瀬 | 内 | 井 | 井 | は | 高 | 里 | 悦 | 紀 | 久 | 森 | 葉 | 下 | 口 | 口 | 橋 | 橋 | 橋 | 橋 | 根 | 根 | 根 | 根 | |
| 陽 | 桃 | 剛 | ど | 虹 | 邑 | 清 | 正 | 十 | 亮 | 洋 | 寒 | 振 | 江 | 悦 | 紀 | 久 | 森 | 葉 | 下 | 口 | 口 | 橋 | 橋 | 橋 | 橋 | 根 | 根 | 根 | 根 | 根 | |
| 子 | 花 | 周 | り | 洋 | き | 流 | 幸 | 外 | 玄 | 寛 | 蟬 | 華 | 津 | 夫 | 代 | 子 | 野 | 芳 | 一 | 慎 | 陽 | 子 | 武 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 | 夫 |
| 渡 | 渡 | 米 | 吉 | 山 | 山 | 山 | 山 | 柳 | 森 | 森 | 本 | 村 | 武 | 宮 | 水 | 味 | マ | 松 | 松 | 堀 | 堀 | 星 | 武 | 二 | 久 | 播 | 原 | 羽 | 花 | | |
| 辺 | 辺 | 森 | 田 | 本 | 本 | 本 | 本 | 口 | 野 | 須 | 杉 | 松 | 藤 | 藤 | 崎 | 野 | 野 | 本 | 本 | 堀 | 堀 | 星 | 武 | 二 | 久 | 播 | 原 | 羽 | 花 | | |
| 誠 | 誠 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 | 志 |
| 一 | 和 | 規 | 成 | 敏 | 津 | 十 | 正 | 十 | 亮 | 洋 | 寒 | 振 | 江 | 悦 | 紀 | 久 | 森 | 葉 | 下 | 口 | 口 | 橋 | 橋 | 橋 | 橋 | 根 | 根 | 根 | 根 | 根 | |
| 郎 | 弘 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 | 子 |

[主催] 一般社団法人 現代俳句協会 [後援] 文化庁・毎日新聞社・朝日新聞社・読売新聞社

水明通信

俳句と私

榎本道代

昨春秋に、誌友になりました。毎月届く「水明」が、楽しみです。本を開くと、豊かな感性で詠まれた句が沢山掲載されています。感動した句は、ファイルして学んでいます。

俳句をはじめから気付いたことが沢山あります。一つ目は、句会に集う方々は、年を重ねてもとにかく若々しいことです。二つ目は、季節の移ろいに敏感になったことです。

春になると近所を流れる農業用水路に白鷺が舞い降り、水路の岸辺には花菖蒲が咲きます。埼京線の線路と水路の間には森があり、カタツムリも生息していることを知り驚きました。

人生百年時代。一生に一度の人生を俳句と共に歩み続けたいと思うと同時に「水明」の益々の発展と皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

美しき日本語学ぶ梅雨晴間

なぜ、俳句なのか

私が俳句を選んだ理由

特集

石原ユキオ／岩田 奎／小川楓子

小野裕三／榎本田貴

関灯之介／高崎公久

長島衣伊子／中村安伸

▽巻頭三句

大木あまり／鈴木しげを

森田純一郎／高橋健文

池田恵美子／永井江美子

▽今月の筆

中内亮玄／森賀まり

▽俳句と短歌の10作数読

高良真実＋柳元佑太

「香雨」高野山吟行記

矢野みはる

▽今月のハイライト

「玉藻」創刊95周年

戦後80年――

後世に残したい

戦争を詠んだ二句

赤羽根めぐみ／鈴木 崇

ふけとしこ／松尾隆信

▽好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の語源

イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

――古典籍を旅する

萬屋三郎の手掛けた本の図鑑を掲載

藤村公洋

俳句のまみ

秘矢まりえ

諸家書架

二ノ宮一雄

一望百里



2025年8月号

7月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

風 声

○俳句四季五月号——「季語を詠む『海芋』」欄

池の辺に潜望鏡のごと海芋

鬼之介

○現代俳句五月号——「列島春秋」欄

臍を顕はな少年少女聖五月

永野史代

○現代俳句五月号——「現代俳句年鑑2025」を詠む」欄

飛田伸夫氏の感銘十句抄に

風を読む案山子もあらむ千枚田

菊池ひろこ

○現代俳句五月号——第一回現代俳句「風を詠む」欄

あるはずのない番号へ初電話

池田珪子

釣人のうしろに春の風立ちぬ

井上燈女

喇叭水仙詰襟高き応援団

小林京子

鐘樓の余韻臙の闇に消え

原田秀子

大道芸少し離れて春日傘

丸山マシミ

臙夜の大きく滲む影絵かな

本橋稀香

ゆるる花器両手で支へ春の地震

葛城千世子

○現代俳句五月号——「風を詠む」秀句を探る」欄

若林卓宣氏の感銘八句抄に

大道芸少し離れて春日傘

丸山マシミ

○くちら（中尾公彦主宰）五月号——「受贈俳誌美術館」欄

校章に私学の誇り風光る

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）五月号——「受贈誌拝見」欄

しで紐をほどく指先春寒し

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）五・六月号——「他誌拝見」欄

野仏に供花の匿路や草青む

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）五月号——「諸家近詠」欄

降臨の千年杉や冴返る

鬼之介

○笥（山本一步主宰）五月号——「受贈誌の一句」欄

年忘れ良き事だけを数へけり

小林京子
（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和七年五月三十一日現在—

| | | | | | |
|-------|------|---|------|-------|---|
| 松本光子 | 10 | 口 | 鳥羽和風 | 30 | 口 |
| 上戸千津子 | 10 | 口 | 遠藤人美 | 3 | 口 |
| 小山あつ子 | 10 | 口 | 保坂翔太 | 5 | 口 |
| 綿引まりこ | 5.57 | 口 | 森和子 | 3 | 口 |
| 石川理恵 | 10 | 口 | 井上燈女 | 5 | 口 |
| 田中章嘉 | 5 | 口 | 合計 | 96.57 | 口 |

後記

暑中御見舞申し上げます

日本の夏はどこまで暑くなるのでしょうか。体も気持ちも追いつきません……。

水明創刊九五周年記念特別作品は、俳句三十三篇、エッセイ十一篇、評論一篇という多数の応募がありました。

尚、選者は、山本鬼之介主宰、網野月を氏、石井喜恵氏、石山かつ子氏、それに大村節代の五人。

日高道を氏から、名前を伏せてコピーした全作品を頂きました。選者の端くれに加えて頂いたのが、連日あたふたと作品を拝見しております。今の所は、何れ菖蒲か杜若といった心胸で困りはてております。

小さな声で私は、なんたつて選者になると応募出来ないのです、私の如き者に選者のお声がかかったのだと、聞き直つて、やらせて頂

こうと、皆様の力作を読ませて頂いています。新珠賞は十五句でしたが、今回は三十句です。それを三十三人もご応募されるとは、びっくりしました。

数学は、点数がはっきり出ますが、文学作品は、選者の好き嫌いや好み等で、選が分かれます。新珠賞は選者が多数で、そのうちの一人でしたので、気が楽でしたが、今回は責任大で何度も拝見しているのですが……。

地球温暖化によるのでしょうか。今年梅雨最中に、早々と熱中症で、救急配送される方が過去最多になったそうです。その上、コロナやら带状疱疹も治まらないのに、今度はマダニ感染症とか。マダニを通してウイルスに感染する人獣共通の感染症だそうです。

地球もなんだか住みにくいですね。ウイルスにとりつかれないよう、ゆるりと、のんびりと。

(節代)

今月のはてな？

- 擲 (もた) ぐ
- 知好楽 (ちこうらく)
- 吹墨土草 (ふきずみとくさ)
- 腕 (ひざます) く
- 巨擘 (きよはく)
- 懸 (かけ) の魚
- 老次 (おいなみ)
- 冀 (こいねが) う
- 蛺蝶 (ひおどしちょう)
- 踝 (くるぶし)
- 薇 (せんまい)
- 裏 (つつ) む
- 鋤簾 (じょれん)
- 肖 (あやか) る
- 縹子 (しゆす)
- 止事無 (やんごとな) い
- 下種 (げす)
- 羯諦 (ぎやあてい)
- 匕首 (あいくち)
- 勇魚 (いさな)
- 偃白 (ひきうす)
- 戸定邸 (とじょうてい)

73 72 70 66 66 65 64 60 58 47 ♪ 46 45 42 35 33 31 27 26 25 17 7 頁

水明

令和七年七月号
通巻一一三八号
令和七年七月一日発行

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二
電話 048-822-1474

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替 〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人 山本鬼之介

印刷所 中央美版

水明創刊95周年記念全国大会・記念祝賀会・参加申込書

〈申込締切 8月31日(日)〉

- | | |
|-------------------|------------|
| 1. 記念全国大会・記念祝賀会参加 | 会費 25,000円 |
| 2. 記念全国大会のみ参加 | 会費 5,000円 |
| 3. 記念祝賀会のみ参加 | 会費 20,000円 |

※上記の希望項目の数字を○で囲んでください。

上記参加費を添えて申しこみます。

2025 年 月 日

| | | | |
|---------|------|-----|-----|
| 住 所 〒 | | | |
| 氏 名 | | 電 話 | — — |
| 申込金支払方法 | 郵便振替 | | 現金 |

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)

水明俳句会

※参加費が高額になりますので、7月号に同封の郵便振替用紙にて納金し、「申込書」の「申込金支払方法」の郵便振替を○で囲んでください。

「申込書」は発行所総務部へご郵送ください。

※なお、発行所へ直接持参される方は、「申込書」に参加費を添えて総務部へお申し込み下さい。(発行所ポストへの投函は出来ません)

[緊急連絡先電話番号]

| | |
|---------|-----|
| 電 話 番 号 | — — |
| 氏 名 | |

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。緊急時のみに使用し他の用途には使用いたしません。

季音抄

山本鬼之介

余花残花ひとりで帰る丸木橋
店頭にあふるる蔬菜夏きざす
残花舞ふ投げ込み寺の静寂かな
ばら賞めて強面に笑みもらひけり
日を仰ぎ空をあふぎて桐の花
新緑の磴駆け上る陸上部
巖頭の少女飛び込む夏の川
天平尺に遥かな浪漫風薫る
夏兆す暖簾の色を藍に替へ
八寸に威張る竹の子夜懐石
老いてなほ元マドンナの藍浴衣
アルゼンチンタンゴの夜明け夏めきぬ
通り過ぎれば溜息聞こゆ賀茂祭
播州弁で仇を討ちしや大石忌
満帆の練習船よ夏来る
チューリップ砺波平野を際立たす
合せ鏡は母の鏡台昭和の日
石橋の残る町並夏つばめ

永野史代
星野和葉
町野広子
松井由紀子
茂木和子
森川義子
近藤徹平
梅澤佐江
大場順子
青木鶴城
日高道を
檜鼻ことは
渋谷さいち
保坂翔太
染谷風子
横山君夫
石田慶子
下川光子

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み
(上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内をお願いします。)

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

- ▼一句鑑賞
- ▼散歩道へ身辺トピック▼
- ▼山紫水明へ随筆▼

水 明 抄

山本鬼之介

花の中ゆく佐保姫の耳飾り
 春灯に浮かぶ坪庭京の宿
 行く春や母に青春時代あり
 まだ遠き音のうねりや春の雷
 春雷や寝言の犬の耳のむき
 笑ふ山ケーブルカーの櫛りぬ
 茶碗室がしいんとしるる春の昼
 春陰や階段を踏む膝の声
 ちやぶだいはいつも真ん中桃の花
 春雨や此所はかつての宿場町
 妖しさや春の闇濃き泪塚
 晩節のピアノレッスン蝶の昼
 しづしづと分け行く舳先花筏
 軽トラの昭和歌謡や畦長閑
 緑児の肥立ちの動き若楓
 花曇肩に凭るる老婦人
 日をまとひ風にゆだねる桜かな
 春昼や能登千里浜の波静か

霜多光代
 岡田宣子
 小林京子
 菅原真理
 寺町知子
 反町修
 阿部幸代
 皆川更穂
 森下山菜
 丸屋詠子
 倉田星歩
 本橋稀香
 田中弘子
 綿引まりこ
 岡本祥子
 元田亮一
 石関六弦
 飯田忠男

| 水明例会案内 | 句会名 | 日 時 | 会 場 | 指 導 者 | 幹 事 |
|--------|------|-----------|--------------------------|-------|---------------|
| | 第一例会 | 第1日曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F) | 山本鬼之介 | 茂小 木林和京子 |
| | 第二例会 | 第3金曜・午後1時 | 本所ビッグシップ | 網野月を | 山青中みどり 木鶴城 |
| | 第三例会 | 第1月曜・午後1時 | 京橋区民会館 | 山本鬼之介 | 五明 昇 曲淵 徹雄 |
| | 第四例会 | 第1木曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F) | 山本鬼之介 | 石井喜恵 反町修 |
| | 第五例会 | 第3火曜・午後1時 | 水明発行所 | 山本鬼之介 | 梅澤佐江 河野はるみ |
| | 若松例会 | 第1土曜・午後1時 | 京橋区民館 | 山本鬼之介 | 正木萬蝶 石田慶子 |
| | 関西例会 | 第3日曜・午後1時 | 守口市文化(セ) | 大橋勉代 | 森本早苗 |

水 明

令和七年七月一日発行 毎月一日発行

(第九十八巻 第七号)

定価 一〇〇〇円